2024（令和6）年度

千葉県NIE実践報告書

（*Newspaper in Education*＝教育に新聞を）

我孫子市立湖北小学校
市川市立鶴指小学校
印西市立高花小学校
鎌ケ谷市立鎌ケ谷小学校
匝瑳市立豊栄小学校
袖ケ浦市立中川小学校
千葉市立園生小学校
八千代市立大和田西小学校
御宿町立御宿中学校
市原市立菊間中学校
香取市立新島中学校
九十九里町立九十九里中学校
千葉市立貝塚中学校
芝浦工業大学柏中学高等学校
千葉県立松戸国際高等学校

千葉県 NIE 推進協議会

ご　挨　拶

千葉県ＮＩＥ推進協議会会長
松　井　　聰
（千葉大学教育学部教授）

平素より、千葉県NIE推進協議会の活動に対してご理解・ご協力を賜り、ありがとうございます。

千葉県NIE推進協議会の実践報告書を本年も刊行できますことを、大変うれしく思います。本報告書を手に取った皆さまにとって「新たな気づき」や「他者への理解」、さらには「NIE活動の推進」につながることを祈念しつつお届けします。

昨今の社会変化、特に、生成AIの登場とその急速な普及は、情報のあり方、そして「知る」「考える」「表現する」ことの意味に大きな影響を与えています。情報を手軽に得て、広く発信できる一方で、「その情報は信頼できるのか」や「自分の考えをどう持つのか」といった、本質的な問いが今まで以上に求められています。同時に、SNSの普及も子どもたちの情報環境を大きく変えています。便利さと引き換えに、時には、匿名性のもとで人を傷つける言葉が飛び交い、他者と冷静に向き合う機会さえ奪われてしまうこともあります。このような状況において、情報を伝える速さだけでなく、「正確性や公正さ」にも配慮して届けられている新聞は、情報化社会の土台を支え、社会を維持するために欠かせない仕事＝エッセンシャルワークの役割を担うことになってきたとも言えそうです。

2024年８月に開催されたNIE全国大会京都大会に参加して参りました。参加者の多さ、登壇する方々の熱量、幅広い世代がつながりあう姿に大変感銘を受けました。大ホールで参加者が一斉に新聞を広げた時の光景は、今も目に焼き付いています。新聞は、事実に基づいた報道を通して、読者に「なぜ？」「どう思う？」という問いを投げかけます。記事を読み、背景を調べ、他者の意見を聞き、自らの考えを組み立てていく一連の過程こそが、情報を主体的に扱う力、つまり「メディア・リテラシー」を育む土台となります。さらに、紙面を通じて地域や世界とつながる実感を得ることで、子どもたちは自分自身と社会との関係を見つめ、よりよい未来を創り出す力となるのです。こうした時代だからこそ、NIEの意義はますます大きくなっているのです。

本報告書に掲載された15件の実践には、それぞれに「願い」と「工夫」が込められています。探究的な学び、教科横断的な取り組み、発信型の活動など学校種や学年・教科ごとに異なる特色をもちながらも、共通して「子どもたちに確かな学びを届けたい」という強い思いが感じられます。NIEを通じて育まれる力は、「情報を見つけ、活用する力」「思考を深める力」「共に学び合う力」であり、次代を生きる子どもたちにとっての真の学びとなります。今後も、NIEに集う教育関係者や新聞関係者が連携協力して「新聞活用の極意」を積み上げているよう、関係者一同で協働して参りたいと思っています。

結びに、本報告書の作成にあたりご尽力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げるとともに、本県のNIEのさらなる広がりと、子どもたちの豊かな学びの実現を心より願って、挨拶とさせていただきます。

目　　次

小学校

我孫子市立湖北小学校 …… 1
市川市立鶴指小学校 …… 4
印西市立高花小学校 …… 7
鎌ケ谷市立鎌ケ谷小学校 …… 10
匝瑳市立豊栄小学校 …… 13
袖ケ浦市立中川小学校 …… 15
千葉市立園生小学校 …… 17
八千代市立大和田西小学校 …… 23

中学校

御宿町立御宿中学校 …… 25
市原市立菊間中学校 …… 28
香取市立新島中学校 …… 32
九十九里町立九十九里中学校 …… 37
千葉市立貝塚中学校 …… 39

中高一貫校

芝浦工業大学柏中学高等学校 …… 44

高等学校

千葉県立松戸国際高等学校 …… 46

新聞に親しむ活動から作成する活動へ

我孫子市立湖北小学校　　園　陽平

１　はじめに

本校では令和５年度からＮＩＥ教育の実践指定を受け、新聞を活用した実践に取り組んできた。 実施初年度だった昨年度は、主に新聞に慣れ親しむことを目標として取り組んだ。

２年目となった今年度は、昨年度から行ってきたＮＩＥタイムを継続するとともに、新聞をいつでも手に取って読めるＮＩＥコーナーの設置、そして新聞を作成して表現することを主だった実践として進めてきた。

２　実践状況

①ＮＩＥタイム（全学年）

毎週金曜日の朝自習の時間を「ＮＩＥタイム」と設定し、全校で新聞を読む活動を行った。 低学年・中学年・高学年それぞれで教員が気になった記事をスクラップし、学年の実態に応じたワークシートを作成した。

低学年では、長期休みなどにまとめてワークシートを作成することで、教師の負担感の軽減につなげることができた。

中学年では、120字以上書けるワークシートにして続けたことで児童の書く力を向上させることができた。

高学年では、児童が選んだ記事をワークシートにするなど、児童主体の活動につなげることができた。

②ＮＩＥコーナーの設置

児童がいつでも新聞を手に取って読める環境を作るために、児童昇降口にＮＩＥコーナーを設置した。 毎日届く新聞や小学生新聞を置いたほか、児童が自主的に取り組んだ、新聞記事と、読んだ感想をまとめた自主学習のノートを掲示した。

③新聞を作成する実践

１.「ふるさと我孫子の先人たち」（総合・第６学年）

児童が住む我孫子市の様々な功績を遺した先人たちについて調べた内容を新聞にまとめる活動を行った。 まず一人の人物の功績を調べ、次に新聞に載せたい内容を班で話し合って三つ選び、タブレット端末を用いて共同編集で新聞を作成した。

２.「我孫子市マイスターになろう」（総合・第３学年）

我孫子市の行事についてインターネットなどを活用して調べ、 ２～３人のグループでタブレット端末を用いて新聞を作成して発表した。

3.「なかよし新聞～湖北小の先生方はどこから来たの?～」(総合、自立活動・特別支援学級)

校内の先生たちに出身地などをインタビューし、日本地図にまとめた壁新聞を作成した。 活動で分かったことを編集後記にまとめた。

4.「作ろう学級新聞」(国語・第4学年)

学校のみんなに知らせたいことについて、インタビューしたり、アンケートをとったりと取材をした。写真も含めて集めた材料を分かりやすく新聞にまとめた。

5.「社会のまとめ新聞」(第4～6学年)

単元のまとめとして、新聞にまとめる活動を多くの単元で行った。 4年生は紙に、5年生と6年生はタブレット端末を用いてまとめた。 継続して行うことで、児童のまとめる力、表現する力が身についてきた。

江戸新聞

6年 2組
名前

徳川家光がやったこと

徳川秀吉のあとをついだ徳川家光。日光東照宮を立てた人。全国の大名を引き連れて、参拝を繰り返す。大名たちに幕府の力を見せつけた。家康の江戸城江を改修、全国支配にする拠点とした。町人が江戸に住む。多くの人が江戸に住みにきわい。武家諸法度により、全国の多くの大名が取り潰された。将軍の力が大きくなった。江戸幕府の仕組みも家光のころに確立し、安定した世の中に。

・武家諸法度
・自由に城を建ててはいけない（将軍の許可に反すると取り潰される）

キリスト教の禁止

初めは、外国との貿易をさかんにしていた。だから、大名や商人に許可状をあたえていた。多くの貿易船が東南アジアに向かい、各地に日本町がつくられた。外国の貿易船にいた宣教師たちにより、国内にキリスト教の信者が増えると、江戸幕府の使命を重んじる信者が幕府の命令に従わなくなってしまうから、キリスト教を禁止した。絵踏みを行って信者を見つけて厳しく取り締まった。宣教師や貿易船の出入りを制限した。そして、海外に行くことも海外から帰ってくることも禁止した。

書きたこと・思ったこと

私がどうしてこうなったのかわからないところだらけだったけど、色々調べてみればわかりました。昔にびっくりしたところは、商業文化です。一年に一回くらいしか、自分の家や子供に会えなくなるのはびっくりしました。でも確かに自分が将軍の立場だったら、大名のことを信えないもっと部分が合わないし、自分より強くなることが一番ダメなことだから、将軍からすると言い行いだなと思いました。そして、一番思ったことはどうして、キリスト教を禁止したのかが一番気になりました。明治を調べるっていいんじゃないかなと思っていたけど、確かに海外に行けなくなってしまうと大変になると思いました。江戸の時代はびっくりすることが多かったです。もっとどんなことをしたのか知りたいともいました。

④新聞を活用した実践

「カタカナで表す言葉」(国語・第2学年)

新聞からカタカナを探し、仲間分けを行った。

①外国から入ってきた言葉

②外国の地名や名前

③音

３　成果と課題

成果

○昨年度から継続してＮＩＥタイムの新聞ワークシートに取り組んだことで、児童の書く文量や表現する力が向上した。

○様々な教科で新聞を作成して表現する活動を取り入れたことや、社会科で継続して新聞を作成したことで、まとめる力が身についてきた。

○新聞を作成する過程で、タブレット端末を用いてグループで共同編集したことで、協働的な学びにつなげることができた。

課題

●新聞を作成するだけでなく、目的意識や相手意識をはっきりさせて計画やゴールを設定するべきだった。

●ＮＩＥコーナーを設置したが、なかなか手に取る児童が少なく、児童が作成した新聞をＮＩＥコーナーに掲示するなどの工夫が必要だった。

レッツトライ新聞教育

市川市立鶴指小学校　　竹内　光司

１　はじめに

鶴指小学校は、令和６年度から千葉県ＮＩＥ実践校の指定を受け、「レッツトライ新聞教育」を合言葉に実践を始めた。

指定一年目は、「新聞教育に親しむ」「新聞の可能性を知る」ことを念頭においた。

本校の児童は授業に新聞を導入することをすんなりと受け入れ、活動を楽しみ向上する姿が見られた。

研究はまず環境を整えること、適切な作品モデルを用意することから始めた。

２　実践状況

（１）ＮＩＥコーナーの設置

本事業で届いた新聞を活用しやすいように、二階昇降口に、新聞社ごとに棚に収納した。また、新聞用紙やこれまでの実践例をファイルに綴じて置いておいたり、児童の作品を掲示したりした。

〈２階昇降口の広場に設置したNIEコーナー〉

〈教師モデル、先輩児童の作品を学年別にファイルして閲覧できるようにした〉

（２）ＮＩＥタイムの設定

朝学習の時間（8:25～8:40）をＮＩＥタイムとして、新聞スクラップに取り組んだ。新聞づくりと隔週で、２週に一回、取り組んだ。

スクラップにあたっては、児童それぞれが、興味関心をもった記事を切り抜き、記事を読んだ。その際には、大事だと思った言葉、文に下線を引いた。その後、その下線をもとに要約し、感想をまとめた。さらには、その過程で気になったことを調べた。回数を重ねる中で、記事の切り抜き、要約、感想の流れがスムーズになり、読解力や表現力が少しずつ養われたことがうかがえた。

〈新聞スクラップ〉

夏前には、全国から地方紙を集め、同じ日の記事を切り抜き、要約、感想を書いた。そして、それを日本地図に貼った。さらには、それぞれの要約や感想に読んだ人の思いを貼った。多くの児童が、地方紙同士を読み比べることで、日本を俯瞰することができた。

〈地方紙読み比べ〉

（３）各学年の取り組み

①２年生

国語科「わにのおじいさんの宝物」では、児童一人一人の感想をはがき新聞に書き、それを壁新聞に貼り、一枚の新聞とした。 壁新聞には、新聞紙に着色してほうの葉を作り、わにの体にかけた場面を表現した。 低学年では新聞の肌触りを感じることも大事と考えている。 新聞を活用したり、自らも新聞を書いたりすることでバランスよく力をつけることができるだろう。

②４年生

国語科「写真から読み取る」では、新聞から気になった写真を選び、話の構成を考え、紹介した。新聞から写真を選べない児童には、先生が選んだ写真を準備することで写真を選べない児童も活動に参加することができた。 写真を選んだ後の話の構成を考える前段階では、オクリンクを用い、友達同士、意見を交流した。 写真から感じたことや気づいたことを広げるよい機会になった。

〈オクリンクのカード〉

〈児童が取り上げた記事の一覧〉

③５年生

国語科「川柳をつくろう」では、時事川柳をつくった。 気になった記事を切り抜き、音読した。 内容を理解したのち、それを川柳にまとめた。 多くの児童が楽しんで川柳を詠む姿が見られ、言葉選びにこだわる児童の姿も見られた。

④６年生

総合的な学習の時間「働くって何？」では、児童の興味関心に合わせて、新聞記事を集めた。 集めた記事を分類・整理し、切り抜き作品づくりとした。児童は以下のテーマに沿って、作品作りを進めた。

・男女不平等　・多様な働き方　・配送

・自動運転　・AIと働き方　・闇バイト

・カスタマーハラスメント

作品作りにあたっては、グループで対話しながら進めた。揉めることもあったが、コミュニケーション能力を育成する機会となった。また、そのようにして対話を重ねる中で、社会の出来事が自分事となっていった。さらには、言葉の感覚も磨かれていった。見出しは、より良いものにと、何度も貼り替えた。

〈テーマ別にグループを作り、話し合いや
再調査を繰り返し、作成した児童の作品〉

３　成果

○教員

・概ね全ての学年で新聞活用に取り組むことができた。

・各学級の作品等を廊下等に掲示することで教員間での学び合いが進んだ。

○児童

①仲間づくり

それぞれのものの見方、考え方を認めながら話し合い、考えをまとめる過程で、チーム力がついた。また、完成した作品などは、友達同士で見合い、次の機会に生かされた。

②主権者意識

様々な社会情勢を目の当たりにして社会への関心が高まり、社会の出来事を自分事として捉えることができる児童が多くなり、一つ一つの記事に対して、自分の意見をもつことができる児童が増えた。

③豊かな言語表現

記事に合う、見出しをつけたり、新聞の見出しから内容を想像したりする活動から言葉選びの感覚をつかむことができた。

また、国語をはじめとする各教科の授業で学んだことを生かして、文章の構成、要約力、発信力等を身につけることができた。

４　課題

○教員

・全ての学年で継続的に取り組むことができるようにすることで、新聞教育の質を高める。

・様々なツールがある中で、新聞教育の良さを分かった上で、指導できるとよい。

・初年度ということもあり、継続的、計画的に新聞教育を取り入れることができなかった。カリキュラムマネジメントの視点で、効果的に新聞教育を取り入れていけるとよい。

・実態調査を行ったが、十分な分析と対策ができず、学力向上と社会に対して視野を広げることに結びつくところまでいかなかった。

・無理なく新聞教育を取り組めるカリキュラムをつくり、実践したい。

○児童

・まだまだ経験や社会への関心がうすく、大事な情報を見極めることが難しい児童がいた。

・もっと新聞に触れる機会をつくる必要がある。

新聞に親しもう～新聞を使った授業作り～

印西市立高花小学校　　岩井　聡志

１　はじめに

昨今の情報取得手段を見ると，インターネット回線を使ってのネットニュース，ネットテレビ，ＳＮＳ等オンライン取得が主流となり，オールドメディアと揶揄さえされているテレビ，ラジオ，ましてや新聞を通しての情報取得は年々減ってきている。

そのことは，新聞購読者数の変移を見ても明らかである。とは言え，就中，新聞から得られる情報は取材，編集，検閲等の厳しい過程を経て提供されるものだけに，信憑性に関しては優位にあると考える。

そこで，ＮＩＥ教育推進指定校１年目である本校においては，６年生を対象として，新聞から世の中の情勢を知り，それに対しての記者の意見や捉え方を理解するとともに，自分ならどう考えるか，捉えるかの立場表明をさせる意見文を書くことを目的として，以下の通り実践を行った。

２　実践内容

まずは，世の中にある新聞の数に触れさせ，これほどまでに多くの新聞が発行されていることに驚きをもたせるとともに，その理由を考えさせることで，地域に密着した内容を取り上げているものや，特定産業や業界中心の記事を扱っているものがあることに気づいた。また，同じ記事でも扱い方や取り上げ方に違いがあることにも気づき，それらの性格が新聞社または新聞紙の数に反映されているのでは，という関心を引くことにもつながった。

次に，複数の新聞から目を引いた記事（見出し）や写真を見つけさせることから，新聞を読むきっかけ作りをするとともに，自分に合った新聞やレイアウトに気づくきっかけ作りとした。読む回数が増えるにつれ，記事に対して自分の考えを述べられそうな話題を選ぶことができるようになった。また，同じ「ネタ」を扱った記事に関して，新聞社の違いにより，取り上げ方にも違いがあること，取材した理由や筆者の考え方にも違いがあることを気づかせることで，「さらに調べたい」「自分も意見を述べたい」等，社会科や国語科との教科横断的な取り組みへと発展した。

学習のまとめとして，記事から筆者の言いたいことと自分の意見を比べて書くことにも取り組ませ，「十二歳の主張」とした。筆者の考えに賛成なのか反対なのかを明確にさせ，それに対しての根拠や理由等を書く形にした。冊子にまとめたり，パネルディスカッションで意見を交換したりと，子どもたちが自分の意見を，根拠をもとに述べることに心地よさを感じるとともに，社会の一員として責任をもって発言することの大切さにも気づかせるキャリア教育への発展も期待した。

３　成果と課題

○授業では，新聞の記事に興味をもつ児童が増えた。また，社会の様々なことに興味関心をもつようになった。

○新聞記事に対して自分の意見をもち，それに対しての根拠等を述べられるようになった児童が増えた。

○自分の好きな分野だけではなく，幅広い視野で物事を見られるようになってきた。

○書くことが苦手な児童でも，書き手の意図を読み取り，自分の考えを伝えることができるようになってきた。

○いわゆる「ななめ読み」の力が付き，紙面を読む所要時間が短くなり，結果として多くの記事に触れることにつながった。

○家庭での会話に社会的な話題も増え，我が子の成長を感じるよい機会となった。（保護者の感想から）

○レシピを紹介した記事や地元の店を紹介した記事が，家族団らんでの話題にあがり，そこでさらなる議論の場が設けられた。（保護者の感想から）

○紙面で使われる用語に関心をもち，自由学習（家庭学習）へとつなげるきっかけとなった。

●他学年にも取り入れ，学校全体で新聞に興味をもたせるようにしたい。

●年間指導計画の中で，国語科だけでなく，他教科でも取り組めるかを考える必要がある。

●読むことや書くことが苦手な児童に対して，どのように活動に取り組ませるかを考える必要がある。

●定期的な購読が難しく，このような機会がないと，継続した取り組みが難しい。

●オリジナル新聞展などを開催する等，全校への波及を推進することができなかった。

４　まとめ

今回は６年生を対象として，実践を行った。普段，新聞を読むことが少ない児童だが，複数の新聞から目を引いた記事や写真を見つけさせることで，新聞を読むきっかけを作ることができた。新聞に慣れていない児童にとっては，その情報量の多さに戸惑い，どの情報を自分事として捉えれば良いのか選ぶまでには至らなかったが，日を重ねる毎に，記事に対して自分の考えを述べられそうな話題を選ぶことができるようになった。また，児童自身に自覚は感じられなかったが，速読や「ななめ読み」等の技能が自然に身に付き，社会面を読むために要する時間が活動当初に比べ短縮された。接続詞に注目したテストでは，的確な接続詞を選択できるようになり，より論理的思考が高まった児童も見られた。

このように，新聞を読む活動を通して，国語科の4領域とされている「読む」「書く」「聞く」「話す」のうち，音声言語よりも文字言語が，出力系よりも入力系である「読む」「聞く」ことの大切さを再認識させることにつながった。

「話せば1分，書くには10分」のとおり，話すことで済ませがちなことも，10倍の時間をかけて書くことの大変さを「責任」と置き換えることで，「書く＝苦手」と短絡的に考える児童も減り，ましてや「聞けば1分，読むには10分」のとおり，聞いてしまえば1分で済むことも，自分で読み解くにはさらなる時間を要することにも児童自身が気づき，「読む＝苦手」の図式も成り立たないようになってきた。つまるところ，書くにも読むにも，時間がかかって当然，そこには責任が生じてくる，という気づきへとつなげることができた。

今後は自分自身の考えをもつことができた活動の延長として，クリティカル・シンキングにもつなげ，情報の取捨選択にとどまらず，信憑性についても考える思考を養っていきたい。

特に，世界情勢を見るうえでも，様々な社説や解説が混ざるなか，児童の会話から「ウクライナは何かわるいことをしたの？」「アメリカって世界のリーダーなの？」等，公教育のなかでは公平性を保たなければならないなか，児童自身が確固たる考えをもつことは，大きな意味があると考える。

このような活動は６年生や国語科だけにとどまらず，他学年や他教科でも発達段階や教科の特性に応じて取り組むことが可能であり，そのためのカリキュラム編成も考える必要がある。

新聞に親しむ活動の充実
～総合的な学習の時間を通して～

鎌ケ谷市立鎌ケ谷小学校　　江花　大樹

１　はじめに

本校は、今年度よりＮＩＥ推進実践校としての指定を受け、取組を進めてきた。

一年目のゴールは「新聞に親しむ」に設定し、「新聞を読むのは楽しい」と思える児童が一人でも増えるような取組をしていけるよう職員で共通理解を図り、実践を行った。

２　実践状況

＜3年生＞

「新聞記事を紹介しよう！～○月は何が起きた！？～」という単元名で、９月、１０月、１１月の新聞記事の紹介活動を行った。読売KODOMO新聞の記事を読み込み、班で紹介する記事を決定する。その後、５W１Hを意識して紹介文を考え、CANVAのホワイトボード機能を用いて内容の共有を行った。それぞれが他の班が紹介している記事を読み、気になったものにはコメント機能を用いて前向きなメッセージを残すなど、ICTを活用して新聞に親しめるように取り組んだ。

＜5年生＞

国語の「新聞記事を読み比べよう」の単元と平行して実践を行った。国語で学習したことを生かし、記事の見出しを考える活動を行った。また、見出し、書き手の意図によって内容が異なるという学習を生かし、林間学校に行ったことについて、自分たちで新聞にまとめる活動を行った。

＜4年生、６年生＞

「選んだテーマの記事を集めて、新聞スクラップ作品を作ろう！」という単元を設定し、２学期に活動を行った。「防災」「政治」「環境」など、それぞれがテーマを一つ決め、関連する記事を集めることから始めた。その後、CANVAを用いて作品を制作した。「どんなことが書かれているか（記事の要約）」「考えたこと」「記事の切り抜き」が基本的な内容であることを確認し、活動を進めることができた。

＜特別支援学級＞

「新聞を読んで感想を書こう！」という単元を設定し、実践を行った。教師側が選んだ記事についてみんなで話し合い、感想を書いて模造紙にまとめた。

＜ＮＩＥコーナー＞

校舎２階の渡り廊下に、ＮＩＥコーナーを設置した。「政治」「スポーツ」など記事の内容ごとに分類して配置し、興味のあるものを気軽に読めるように工夫して配置した。また、新聞に答えが書いてあるクイズを設けることで、新聞記事を読む動機づけを図った。

＜授業研究会、協議会、理論研修の実施＞

11月29日に、３年生の取り組みである「新聞記事を紹介しよう！」について、授業研究会、協議会を行った。また、この日に講師としてお招きしたＮＩＥアドバイザーである武藤和彦先生から、新聞教育についての基礎的な理論研修をしていただいた。

３　成果と課題

＜成果＞

・ 今年度のゴールである「新聞に親しむ」については、例年に比べ新聞に接する機会が大幅に増加したため、達成することができた。児童の様子からも、興味を持って取り組む姿が見られた。
・ 授業研究会、協議会を行ったことで、全職員が新聞をどのように読ませるか、どのように授業で活用するかについて議論を深める機会をつくることができた。
・ 理論研修を行ったことで、職員のＮＩＥへの取り組みに対する意欲の向上につなげることができた。

＜課題＞

・ 新聞を用いて学びを深めるという視点では、今年度の取り組みは浅いものとなった。
・ 新聞を授業に取り入れる際に、アナログとデジタルのメリット、デメリットをよく考え、取り入れていく必要がある。
・ 児童数800名以上を超える本校では、全校でＮＩＥに取り組んでいくにあたって、そもそもの新聞の総数が足りず、日常的な実践を円滑に進めていく上での大きな障害となった。
・ ＮＩＥコーナーについては、閲覧者のさらなる増加のために、配置場所や掲示方法の工夫を検討する必要がある。

４　おわりに

今年度の取り組みによって、児童と職員どちらにとっても、新聞に対しての意識を高める良い機会となった。今年度の成果と課題を踏まえ、来年度もさらなる活動の充実を図れるよう取り組んでいきたい。

新聞に親しみ、インプットから
アウトプットする力の育成を目指して

匝瑳市立豊栄小学校　　大木　浩　〈協力者〉川口　千絵、菅井　直樹

１　はじめに

本校では令和５年度よりＮＩＥ推進校の指定を受け、本報告は２年目の実践である。

１年目の成果としては、新聞に慣れ親しむ活動を通して、児童にとって新聞がより身近な存在になったこと、読解力が付いてきたことである。

２年目である令和６年度は、さらに新聞に慣れ親しむ活動を継続しつつ、新聞記事から読み取った内容を友だちに発信する活動に重点を置き、児童が新聞に親しみ、自分の考えを持ち、表現する力を育成することをめざした。

２　実践内容

（１）新聞に親しむ活動

①新聞を読む時間の確保

昨年度に続き、朝の読書タイムの時間を活用し、新聞の記事に目を向ける取り組みをしてきた。 初めは新聞を準備し、パラパラと開いて終わりになる児童もいたが、様々な記事の中から15分間で読める記事、気になった記事を選び、じっくりと読むことができるようになることをねらいとした。

②新聞を読むスペースの作成

本校は廊下が広く、ホールとして活用できる構造となっているため、昨年度に引き続き、そこに新聞を読むスペースを作成した。 毎朝送られてくる各社の新聞を置き、昨年度同様、いつでも読める場を設定した。

（２）読み取った内容を表現する活動

①５年生の活動

今年度は自分が読み込んだ記事の中から、友だちに知らせたい記事を切り抜き、記事の概要をクラス全体の前で発表する活動を行った。 また、各自がスクラップした記事は一冊にまとめ、好きな時間に誰もが読めるようにした。

②６年生の活動

今年度は５年生と同様、自分が読み込んだ記事を友だちに伝える活動に重きをおき、そのツールとしてタブレット端末を活用した。 以下に活動内容を示す。

○題材名

「新聞の内容を要約し、ニュースキャスター風に伝えよう」（学級活動）

○活動内容

・学習計画を立てる

「新聞記事の内容を要約し、ニュースキャスター風に伝える」というゴールイメージをもつことで、学習の見通しを立てられるようにする。

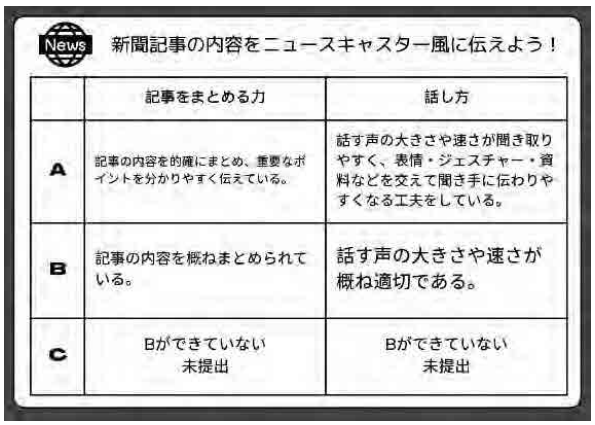
・テーマを決める

新聞記事の中から、自分が興味関心をもった内容の記事を選ばせる。

〈新聞記事から自分のテーマを選ぶ児童の様子〉

・**発表の準備をする**

原稿作りの際に本単元の評価基準をまとめたルーブリックを示すことで、発表の際のポイントをおさえながら準備に取り組めるようにする。



News 新聞記事の内容をニュースキャスター風に伝えよう！

	記事をまとめる力	話し方
A	記事の内容を的確にまとめ、重要なポイントを分かりやすく伝えている。	話す声の大きさや速さが聞き取りやすく、表情・ジェスチャー・資料などを交えて聞き手に伝わりやすくなる工夫をしている。
B	記事の内容を概ねまとめられている。	話す声の大きさや速さが概ね適切である。
C	Bができていない 未提出	Bができていない 未提出

〈原稿作りの際に使用したルーブリック表〉

・**要約した内容をニュースキャスター風に伝える**

一人一台端末の「発表ノート」に自分の発表を録画して提出させる。

・**発表内容を見合い、相互評価をする**

提出したデータを共有することで互いの発表を見合い、ルーブリックに基づいて相互評価を行う。

〈タブレットに発表を録画し、児童同士で共有する〉

３　成果と課題

〈成果〉

昨年度に引き続き、新聞に慣れ親しませる時間や活動を確保することで、新聞を読むことへの抵抗感がなくなってきたのはもちろん、そのおもしろさを感じ取れる児童も出てきた。

また、今年度は表現（アウトプット）する力の向上をめざした結果、個々の活動からクラスみんなの活動に広がり、児童のモチベーションにもつながった。

特にタブレット端末を活用した取り組みでは、「ニュースキャスター風に伝える」というゴールイメージを明確にしたことで、児童は学習の見通しをもつことができ、意欲的に活動に取り組んでいた。

また、ルーブリックを示したことで、各評価の項目を意識して、原稿作りに取り組む姿が見られた。

さらに端末の録画機能を使って自分の発表を提出させることで、何度も撮り直しができ、自分の発表の仕方を自己評価しながら、納得のいくものを提出することが可能になった。

＜課題＞

新聞を通して、読解力や表現力・思考力を高めるには、年単位の長期にわたる取り組みが不可欠であり、学校現場ではその時間の確保の難しさを感じた。

自ら書くことにつなげるＮＩＥ

袖ケ浦市立中川小学校　　多田　祥亜希

１　はじめに

中川小学校は令和５年度からＮＩＥ実践校の指定を受け、本年度は２年目の取り組みとなる。１年目は「新聞に親しもう！」をテーマに、まずは新聞に触れることに主眼を置いて活動してきた。

本年度は「書く」活動を重点的に行って学力向上を図るという国語の校内研究とも関連させ、新聞をより深く知るために「自ら書くことにつなげるＮＩＥ」を目指して各学年で実践を行った。

２　実践状況

【低学年】

低学年の児童にとって、新聞記事は難しい漢字や語句が多く、自力で読んで内容を理解することはまだ難しい。そこで、新聞の見出しや写真などに注目し、興味のある記事を見つけて友達と紹介し合う「マイベスト記事」という活動を行った。

「自ら書くことにつなげるＮＩＥ」という本年度のテーマに沿って、紹介の方法としてワークシートに書き込む方法をとった。自分が選んだ記事を切り抜いてワークシートに貼り、記事の下に選んだ理由やわかったことなどを文章で書き込む。作ったワークシートは教室内に掲示し、お互いに読み合うことで交流を行った。

活動を通して、児童は新聞には多岐にわたる情報が掲載されていることや、見出しの文字の大きさやフォントなどによって伝えたいことの内容に差があることに気付いた。また、記事の内容を深く読み取ることは難しくても、読める言葉や写真などから類推し、文章に表現することができた。

【中学年】

中学年でも「マイベスト記事」の活動を行い、新聞記事を選んで友達と紹介し合った。

中学年では、低学年よりも記事の内容を読み取ることができるようになり、記事を選んだ理由についてもより内容に即して書くことができた。読み取りが難しい児童に対しては、個別に担任が補助して説明するなどして、できる限り記事の内容によって選ぶことができるよう支援した。

また、ワークシートに書き込むだけでなく、それをもとにグループやクラスで発表し合うことによって、友達が選んだ多様な記事に触れることができ、新聞により興味を持つようになった様子がうかがえた。

【高学年】

５年生では、国語の学習との関連を重視しながらＮＩＥ実践を行った。

「新聞記事を読み比べる」という学習では、出生率の低下に関するトップ記事を４紙で読み比べ、気付いたことを発表し合った。３紙は大見出しなどが概ね似ていたものの、１紙だけ出生率に関する記事が２面扱いとなっており、トップ記事は「少子化」という言葉が大見出しに使われていたことから、同じ内容なのになぜ見出しが異なるのかについて話し合うことができた。また、見出しが似ていても内容は新聞によって特徴があり、その理由についてもグループで考えることができた。

「情報ノート」の学習では、自分が興味を持った記事を切り抜いてノートに貼り、内容や考えたことについてメモを書いて情報をストックしていった。新聞記事だけではわからないことについては、インターネットなどを使ってさらに調べ、情報を自らふくらませることができた。

３　結果

低・中・高学年それぞれで実践を行い、発達段階に応じた新聞の読み方を教えてきた。その結果、低学年でも新聞に興味を持つことができ、学年が上がるに従って徐々に記事の内容に迫っていく読み方ができるようになった。

また、どの学年でも必ず「書く」活動につなげることで、表現力を高めるだけでなく内容を読み取ったり考えたりすることにつなげることができた。

４　考察

文章を書くためには、書く材料がなければならない。本校では学習の中に書く活動を意図的に取り入れることによって、書く材料として調べたり考えたり話し合ったりする活動につなげ、児童の学力全体を向上させることができると考えている。

新聞も読むだけでなく、学年に応じて書く活動につなげることによって、深く考えたり、話し合ったりすることができる。新聞を読み、考え、書くという活動は、児童の表現力や学力向上に有効であると考える。

５　まとめ

新聞をとっていない家庭が年々増え、日常的に新聞に触れたことがない児童が半数を超えている。このような状況の中、児童に新聞に触れさせ、読み方を教えるＮＩＥは、民主的な市民を育成するために重要な役割を果たしている。

今後も児童が新聞に触れる機会を積極的に設けていきたい。

新聞に親しみ、必要な情報を取捨選択できる児童の育成

～社会科での新聞資料の活用を通して～

千葉市立園生小学校　　大木　保乃香、加藤　亮多

１　はじめに

本校は、令和６年度よりＮＩＥ実践校として指定を受け、実践を行った。

本校は、新聞を購読している家庭が少なく、身近なものとして捉えていない児童が多いという実態がある。そこで実践1年目となる今年度は、新聞の良さやおもしろさに触れ、より親しみをもてることを目標とした。

また、本校の実践は社会科の授業を中心に行った。社会科の学習は小単元全体を通して、小単元の学習内容に興味や関心をもち、学習の内容の見通しを立てる「つかむ」。学習内容を理解する「調べる」。学習内容を確認し、再構築する「まとめる」。学習内容を発展させ、自分の生活との結び付きを考える「広げる」という学習過程で展開する。これらの学習過程の中に新聞を取り入れることで、新聞に触れる機会を増やすだけでなく、社会的事象に対する興味関心を引き出すことができると考える。

２　実践状況

実践１　４年生「自然災害から人々を守る」

この小単元では、市や県などの関係諸機関（公助）や地域の人々（共助）が協力し、今後想定される自然災害に対し、様々な対策や備えを行っていると理解することをねらいとしている。小単元導入の「つかむ」では、令和６年８月に発令された南海トラフ地震臨時情報に対して、国、県、市などの機関それぞれの対応がわかる複数の記事を提示した。そこから、有事の際は様々な機関が対応しているのではないかという予想をたて、小単元の学習に対して見通しをもてるようにした。小単元終末の「広げる」では、多くの人々が災害への備えをしていないという記事を読み取った。そこから、身近な人々に自助の大切さを伝えようという問題意識のもと、学習してきた関係諸機関の働きや、自分たちができる取組を伝える壁新聞を作成した。

「つかむ」の学習においては、全国に刊行している新聞や千葉日報などから、国や県、市など様々な自治体の対応が読み取れる記事を提示した。また、児童がこれまでに新聞を読んだ経験が少ないという実態を踏まえ、見出しから必要な情報が読み取れるようにした。「自然災害に対しての備えは、市や家庭などの地域の人々が取り組んでいるのではないか」と予想する児童が多かったため、県や国など幅広い機関で対応されている事実に興味をもち、今後の学習に見通しをもって取り組むことができた。

〈「つかむ」にて提示した新聞記事〉

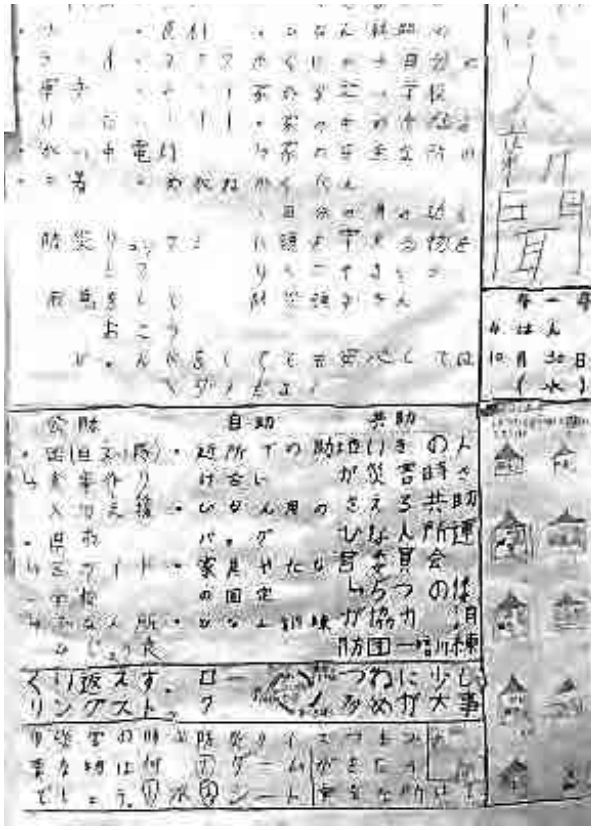
「広げる」の学習では、自然災害に対して備えをしておくことの大切さを身近な人に伝える壁新聞を作成した。まずは壁新聞を作成する目的意識をもたせるために、備えをしっかり行っている家庭が少ないという事実が読み取れる新聞記事を提示した。公

助、共助として関係諸機関が連携し、人々の暮らしを守っていることや、自助として自分たちの生活を守ることの大切さを学んできた児童は、この記事を読んで非常に驚いていた。 そこから、「身近な人に自助の大切さを伝えたい」という目的意識をもつことができた。

〈「広げる」において提示した新聞記事〉

壁新聞には、これまでの学習で学んできた自然災害の恐ろしさ、公助や共助の取組に加え、自助として家庭で行うとよい取組などを選択して記載した。「公助、共助、自助のそれぞれが連携することが大切だと知ってほしい」「ローリングストックは、エコにもつながる自助の取組だから、絶対に記事に載せよう」と、自分なりに伝えたいことをよく考えて活動する様子が見られた。 また、国語科の新聞についての学びを生かし、見出しの文や割付を工夫し、自分たちが伝えたいことがより伝わるような新聞にすることができた。

新聞記事を学習資料として扱ったことで、各関係諸機関が自然災害への対応をしていることを確実につかみ、学習に意欲的に取り組むことができた。また、各新聞により載せられる情報には違いがあり、様々な情報を得ることができると、児童は実感していた。 中には自助の取組を調べる際、自宅に届いた地域新聞に知りたい情報があることに気付き、活用しようとする児童もいた。 さらに壁新聞を作成する学習を行うことで、新聞を用いると自分たちが伝えたい様々な情報を発信することができると気付くこともできた。 一方で、今回の学習では見出しの読み取り程度しか新聞資料を生かせていない。「調べる」学習過程で新聞記事から情報を読み取ることができれば、新聞からは詳細な情報を得られるとより実感することができるであろう。 そのために、短い時間で多くの文章がある記事から情報を得る力を、身に付けさせる必要があると感じた。



〈児童が作成した壁新聞〉

実践２　６年生「長く続いた戦争と人々のくらし」

この小単元では、我が国が戦時体制に移行した

こと、我が国がアジア・太平洋地域において連合国と戦って敗れたこと、国内各地への空襲、沖縄戦、広島・長崎への原子爆弾の投下など、国民が大きな被害を受けたことがわかるようにすることをねらいとしている。 小単元の導入において、終戦の日の新聞記事から戦争に敗れた事実をつかみ、当時の日本はなぜ戦争への道を選んだのか、長く続いた戦争がどのようなものだったか疑問をもたせた。小単元をまとめた後、学習内容を広げる活動の際には、戦時中の新聞記事を示し、戦時体制においては情報統制が敷かれ、新聞などの情報機関が事実をそのまま伝えることができなかったことに触れられるようにした。 また、導入で扱った新聞記事を再度取り上げ、終戦から79年経った現在でも新聞がこの戦争のことを伝え続ける意味や、情報機関の在り方について考えられるようにした。

小単元の導入では、 8月1日から15日までの3紙を準備し、好きに手に取らせたところ、児童はどの新聞にも戦争に関わる記事が載っていることに気付いた。 終戦の日の記事の見出しを取り上げると、「終戦記念日って何？」「いつ日本は戦争していたの？」といった声が上がった。 記事の内容を一緒に読むことで、「なぜ日本は戦争したのだろう」「どのような戦争だったのかな」などという疑問の声が上がり、学習問題につなげることができた。

〈現在の8月の新聞を読む児童の様子〉

学習内容を広げる活動では、戦時中の新聞記事をインターネットで検索し、資料として児童に提示した。 真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦の敗戦、原爆投下、終戦の日の新聞記事を一緒に読み取ると、様々な反応があった。 特に、原爆投下を報じる記事については「え？これだけ？」と、驚きの声が大きく上がった。

〈当時の戦況を伝える新聞記事〉

〈記事を読み取る児童の様子〉

補足として、被害状況を把握することが難しかったこととともに、戦時下の情報統制により情報機関は事実をそのまま伝えることができなかったことを伝えると、「被害が大きかったのに小さいように伝えるのはよくない」「国民は事実を知らされず、国は国民をだましていた」「何を信じればいいかわからない」などの発言があり、情報機関の在り方について考えるきっかけとなった。 また、導入で扱った記事

を再度取り上げ、「なぜ戦後79年経った現在でもこの戦争を記事にするのだろう」と投げかけたことで、「戦争の悲惨さを忘れないようにするため」「二度と戦争をしないようにするため」など、新聞が伝えることで平和祈念の思いを広める役割を果たしていると気付くことができた。

〈学習後の児童のノート〉

新聞記事を学習資料として扱ったことで、５年生「情報産業とわたしたちのくらし」を振り返り、情報は私たちの生活に大きな影響を及ぼしていることを改めて実感するとともに、戦争の悲惨さを忘れず、二度と戦争を引き起こしてはいけないと平和を願う人々の思いにふれることができた。 課題としては、戦時中の新聞記事は限られたものしかなく、新聞記事の内容が難しいと読み取るだけでも時間がかかるため、提示する資料の内容や資料の提示方法を精査する必要があると感じた。

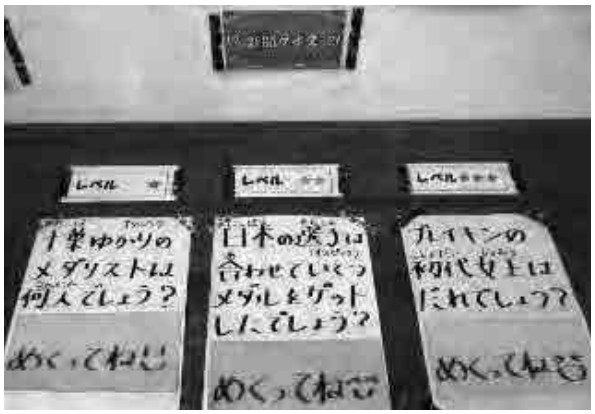
実践３　新聞コーナーの設置

児童が新聞に親しめるようにするための機会として、図書室近くの廊下に新聞コーナーを設置した。

スポーツやSDGs、科学、著名人など、児童が興味をもてるような記事を月に一回程度更新した。 また、児童が最新のニュースを知ることができるような記事を、「今週のニュース」や「地域（千葉県）のニュース」などのコーナーに掲示し、週に一回程度更新するようにした。 その他にも、こども新聞や記事に関わるクイズなどを掲示し、児童が新聞に親しめるような場も設置した。 クイズは答えを記事の写真、見出し、本文などから探すようにし、段階的に新聞が読めるようにした。

児童からは「いろいろなニュースが知れるので、いつも楽しみにしています」「クイズがあって、答えを探すのが楽しいです」「これからも新聞が更新されるのを待っています」などの感想が寄せられ、新聞コーナーで新聞を見ることを楽しみにしている様子がうかがえた。 新聞に親しむというねらいに近付くには有効な実践であったと考える。 しかし、クイズコーナーなどの楽しい掲示には目が行くが、記事の内容までじっくり読む児童は少なかった。 ポイントとなる記事の文章に色を付けるなど、児童が記事の内容にも注目できるようにする工夫が必要であると感じた。

〈新聞コーナー全体の様子〉

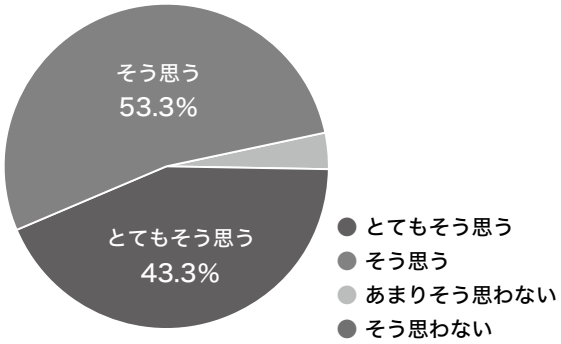


〈クイズコーナーの様子〉

３　結果と考察

〈成果〉

社会科の小単元を通して新聞資料を取り扱ったことで、これまで児童の身近にはなかった新聞に触れあう機会を与えることができた。 実践後の児童へのアンケート調査では、96.6%の児童が「新聞をこれからも生活や学習に生かしたい」と回答していた。「新聞には自分が知らない情報がたくさん載っていることがわかった」「生活に必要な情報がたくさん載っていることがわかった」「新聞に載っている情報をしっかり生活に生かしたい」との意見も多かった。



同一時期の複数社の新聞記事を活用することで、児童は新聞により載せられる情報に違いがあることに気付き、新聞は様々な情報を得るのに有効な手段だと、実感することができた。 また、６年生の実践で扱った平和祈念の思いなど、どの新聞にも載せられている情報は、自分たちの生活に大きく関わっているものであると理解することもできた。

４年生の実践での壁新聞の取組を通して、自分たちが伝えたい様々な情報を発信するのに、新聞が有効な手段であると児童は実感することができた。また、見出しや割付を工夫することによって、自分たちが一番伝えたいことは何なのか、情報を選択しながら取り組むことができた。

〈資料から情報を読み取る児童の様子〉

〈課題〉

新聞コーナーやそれに関わるクイズなどで、児童が新聞に親しむ機会を増やすことができたものの、新聞記事そのものに興味を抱かせるところまでには至らなかった。 また、感想を書いてくれていた児童の数にも、学年・学級で差がある。 より児童が興味をもてるような掲示物の工夫や、全校児童に周知できるような教職員の協力体制を考えていく必要がある。

今回の実践では、「調べる」学習過程においてはあまり新聞資料を活用することができなかった。「調べる」学習過程で新聞を活用するには、見出しだけでなく、記事の本文から必要な情報を見付け出す力を、児童に身に付けさせる必要がある。 今後は朝学習や新聞コーナーなどを活用し、児童が記事本文にも触れられるような機会を増やしていきたい。また、提示する資料の内容や提示方法についても工夫していきたい。

４　まとめ

実践1年目となる今年度は、これまで児童が身近に捉えられていなかった新聞に触れあう機会を増やし、親しみをもつことをねらいとして実践に取り組んだ。 社会科の学習で、小単元を通して新聞資料を活用することで、児童が新聞に触れあう機会を増やすとともに、多くの情報を得ることができる新聞の良さや、様々な情報から必要なものを選択することの大切さを理解することができた。

今後は、より詳細に情報を取り入れ、発信できる力を児童に育んでいきたい。 記事の本文からも必要な情報を読み取る力を身に付けさせるために、見出しや写真だけでなく、新聞全体を読む機会を増やすことが必要だと考える。

次年度は２年目の実践となるので、朝学習や新聞コーナーの内容により力を入れ、児童が記事本文の情報を読み取ることができるようにしていきたい。

新聞を通して，社会と出会う

八千代市立大和田西小学校　　吉田　恭一

１　はじめに

大和田西小学校は社会科，生活科を核としながら校内研究を進めている。その社会科の学習の中で新聞記事を用いることが多くある。

新聞を通して社会と出会い，そこから子ども一人一人の問いに繋げている。また，本校では新聞を通して触れた社会事象や問題に対して，それぞれの子が納得解や最適解を導き出す学習を行うことで，主体的に社会に参画する力を身に付けさせたいとも考えている。

本校の取り組みと子供の姿から成果を検証したい。

２　取り組み

〈５年生での学習内容〉

本単元では，情報産業で働く人々の工夫や努力に着目した後，情報産業がいかに国民生活に影響を及ぼしているかを学習した。

さらに，新聞報道をもとに，情報の受け手，送り手として大切なことは何か考えた。情報の受け手として正しく判断することや送り手として責任をもつ大切さに気付くことができるように報道被害を取り上げた。

扱った新聞記事は，1994年に起きた松本サリン事件の記事である。その新聞記事や報道被害を受けた河野さんの話は，情報の送り手，受け手として何が大切なのか考えるきっかけとした。

当時の新聞記事を読むことで，誤った報道から犯人であると思ってしまう人の気持ちを疑似体験し，情報を正しく受け取る判断力が必要であることに気付くことができるようにした。

〈授業の様子〉

『「疑惑」は晴れようとも　松本サリン事件の犯人とされた私』　文藝春秋社　河野義行著
『命あるかぎり　松本サリン事件を越えて』　第三文明社　河野義行著
『報道被害』　岩波新書　梓澤和幸著
『読売新聞　１９９４年６月２９日　朝刊』
『朝日新聞　１９９４年６月２９日　朝刊』
『MBCテレビ「MBCニュースナウ」のシリーズ「この人に聞く」　２０１４年６月２５日放送
https://www.youtube.com/watch?v=kKuE4Sa1jrg』

〈扱った資料〉

〈５年生の学習内容から見られた成果と課題〉

子供の情意を動かすためには資料，事実が必要である。その上で新聞資料は有効であった。ただ，新聞の読み取りに関しては，内容が難しかったので読み下し文をつけた方がよかったのではないかと考える。また事実認識が明らかになるように５Ｗ１Ｈでまとめる活動が必要だったかもしれない。

〈３年生での学習内容〉

３年生の学習では，能登半島地震の時に活躍された消防士への取材記事をもとに，消防士の市民の命を守る使命感に触れた。記事には，「家族が心配だったがすぐに出勤したこと」「救えない命もあったが，それでも生きている人のために出勤を続けていること」が書かれてある。

救えなかった命
それでも次の現場へ
消防士の葛藤は続く

朝日新聞

中央工地

この記事をもとに，くらしや命を守るために働く消防士の姿をより感じられるようにした。

また，大災害となると消防士でも救えない命があるという現実にも触れさせた。

〈３年生の学習内容から見られた成果と課題〉

この学習を通して，消防士という仕事の尊さに触れることができたと考える。 また，消防士でも救えない命があることを知り，自分の命を自分で守ることの必要性にも気づくきっかけとなった。

３　まとめ

ＮＩＥ初年度は新聞に慣れ親しむことに取り組んだ。 今年度は「新聞を通して」学習に取り組む，「新聞を通して」社会を知ることをめあてとした。

本校が核としている社会科という科目は問題解決的な学習を通して，社会認識を深めたり，知識を獲得したりすることを目標としている。 今回，新聞を通して問題に触れさせた際に一人一人によって感じ方に違いが見られた。 こうした，他者の価値観に触れ，自分の最適解や納得解を導き出す学習は，公民的資質の育成を目指す社会科の学習において，有効であったと感じる。

新聞という扉を通して社会を知り，それが気付きとなる。 時には今まで考えていたことの違いから葛藤が生まれる。 新聞は，人の思いや願いに触れる教材であると感じた。

生徒が主体的に取り組もうとする授業の充実を目指して
～新聞を活用する題材や場面の設定の工夫を通して～

御宿町立御宿中学校　　石井　裕子

１　はじめに

本校は、令和５年度からの２年間、ＮＩＥ推進実践校の指定を受け、１年目は、生徒が新聞に関心をもち、各教科での活用の場面を考え実践した。２年目となる今年度は、前年度の取組を継続し、発展させ、より新聞に関心をもち、新聞の活用が充実するような取組を考え、実践した。また、各教科を通して、新聞を活用する題材や場面を設定し、情報の活用の仕方や情報をもとに考える力を養うことを目標に取り組んだ。

２　実践状況

（１）国語科、総合的な学習の時間

３年生の国語と総合的な学習の時間に、新聞を参考に修学旅行の事後新聞を作成した。国語の「文章の種類を選んで書こう」の学習の中では、記事の見出しやレイアウトを工夫して、修学旅行での出来事や感じたこと、思い出を綴った。また、総合的な学習の時間には、記事にあった写真を選んだり、色使いを工夫したりして、タブレットを活用して作成を進めた。生徒たちの新聞のレイアウトは、多種多様で、色使いや紙面構成で印象が大きく変わることを感じ取り、自分の思い出の綴り方を試行錯誤する姿が見られた。

また、読者の興味を引く見出しの表現や、どのような内容が新聞を見る後輩たちにはよいかなど、相手意識をもって作成にあたる姿がうかがえた。

（２）社会科「時事問題に活用」

日々の授業で新聞記事を使い、生徒の関心を最新の情報に向けることをねらいとして取り組んだ。新聞記事を見せたり、新聞記事をもとに話をしたりすることで、新聞以外のメディアで情報を得ていた生徒も改めて新聞からの情報の有効性を感じる場面が見られた。

また、新聞記事を用いて、学期ごとにレポートとしてまとめた。自分が気になる記事を用いて自分の意見を述べ、個々にレポートを作成した。生徒が多く取り上げる記事やニュースもあり、互いのレポートを比べたり話し合ったりすることで、自身の考えを深め、同じ記事でも意見や考えが異なることを感じていた。

（3）数学科「データの活用として」

「箱ひげ図とデータの活用」の授業において、気温のデータを活用した。新聞の情報の中から、天気の記事を探し、気温の推移を使って箱ひげ図にまとめた。気温のデータをもとに生徒同士でどのようにまとめていくのかを意見を出し合って取り組む様子が見られた。

（4）道徳「地域の方に学ぶ」

新聞販売店の方による講話を通して、地域に根ざして働くことや、「新聞屋」としての思いや新聞の読み方を教えていただく取組を行った。日頃、家庭で新聞を購読していない生徒も、「講話を聞くことで新聞の活用について興味をもった」や「新聞をつくる人や届けてくれる人の思いがあるのだと知ることができた」との感想を書いていた。

（5）その他

～廊下掲示・調べ学習のツールとして～

○音楽科　「日本を代表する作曲家を知る」

○国語科　「図書館～日本を代表する作家～」

今年は、日本を代表する著名人が亡くなり、それを伝える記事や追悼の記事を多く取り上げた。時事ニュースとしてだけではなく、その人物の理解を深める掲示とした。

○家庭科　「食生活」の授業で調べ学習のツールとして、活用した。

○委員会活動　報道委員会の常時活動として、給食時の放送を毎日行っている。その日のニュースや出来事を伝えるために、新聞の記事を活用した。限られた放送時間のため、どの情報を全校生徒に伝えるかを考え、慎重に選ぶ姿が見られた。

3　結果

「各教科を通して、新聞を活用する題材や場面を設定し、情報の活用の仕方や情報をもとに、考える力を養う」という目標について、昨年度以上に新聞を活用する教科や活用する機会などを増やして取り組むことができた。昨年度の調査で、「新聞をあまり読まない生徒が多い」ことが明らかになったため、新聞に触れる機会を増やすことを一つの方法として、意識をして取り組んだ。この取組により、生徒が自ら新聞を手に取り、情報を得る場面が見られるようになった。これは、より多くの場面で新聞を活用した結果と考えられる。

4　考察

国語科や社会科など、単元や題材で新聞を活用する教科で積極的に用いたところ、生徒たちが新聞を抵抗なく受け入れ、情報収集のツールとして活用するようになった。タブレット端末などのツールもあ

る中、新聞という選択をするのは、見出しやレイアウトから視覚的に捉えることができる情報があり、生徒もそれを感じ取ったのだと考えられる。

また、生徒の主体的な活動の場面である委員会活動において、生徒が自主的に新聞の記事を活用するようになったことも、多方面から新聞活用を促した取組の成果であると思われる。

５　まとめ

より多くの場面を設定して、新聞を活用することで、生徒が新聞を身近に感じ、情報を得るためのツールとして用いることができるようになってきた。新聞の情報にはさまざまなジャンルがあり、それらの中から自分の気になる情報や必要な情報を得ることができるとともに、思いがけず得られる情報もあるということを理解して新聞を活用していけるようにしたいと思う。

また、新聞を活用することは、新聞のもつ魅力を感じ、新聞の情報から自分の考えをもち、考える力も備わっていくことにつながるのだと感じた。 今後もＮＩＥを通して、社会に目を向けたり、情報の活用をしたりすることのできる生徒の育成に努めていきたい。

新聞記事に興味を持ち、社会の出来事を身近なものとしてとらえる活動

～異なる立場の人を理解し、自分の考えを持つ～

市原市立菊間中学校　　及川　幸子

１　はじめに

実践初年度の今年は、生徒が新聞に興味を持ち、すすんで文章を読み、社会の出来事に関心を持つことを狙いとして活動を開始した。近年、新聞を購読してない家庭が増えている。新聞に関心を持つことで、様々な考えや出来事に触れ、自分の考えを広げていければと考えた。

２　実践状況

【新聞コーナーの設置】

（１）昇降口の新聞コーナー

昇降口に、常に新聞４紙を置き、自由に閲覧できるようにした。また、各紙が取り上げた同じ話題の記事を読み比べできるよう掲示した。

（２）図書室前の新聞コーナー

司書の協力により、各紙一面の話題を定期的に掲示し、話題を解説したり読み比べをしたりした。

【全校の取り組み】

（１）新聞学習

毎週金曜日、全校共通の新聞記事を読み、内容を要約したり自分の意見や質問に対する回答を記述したりした。昇降口付近に設けた新聞コーナーには各学年から抽出した20名分のワークシートを掲示した。

〈新聞コーナー〉

〈記事の読み比べ〉

〈昇降口前の新聞学習コーナー〉

〈新聞学習のまとめ　教室掲示〉

（２）総合学習

本校では４年１サイクル（環境・福祉人権・健康安全・国際理解）でテーマ探究型の総合学習を行っている。今年度は「国際理解」がテーマ。

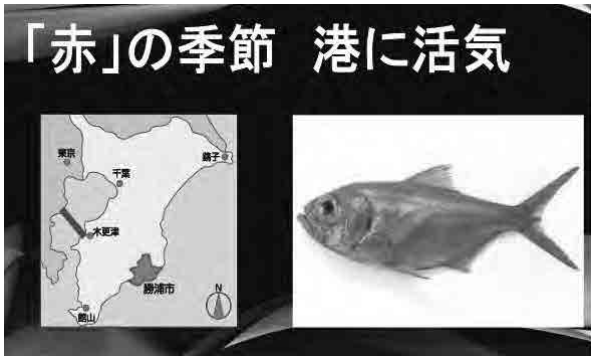
1年；世界の食

2年；世界の中学生の生活について

3年；世界の課題

新聞記事を導入で使い、調べ学習を経て、パワーポイントにまとめ文化祭で各学年から調べたことを発表した。

〈総合学習　導入記事〉



〈総合学習発表　パワーポイント〉

〈総合学習　2学年発表〉

〈総合学習　3学年発表〉

〈総合学習　3学年発表画面〉

（３）各教科　等

国語；作者や題材に関わる記事で深める取り組み。また、記事の読み比べをし、自分の考えを表現する取り組み

社会；歴史分野の補足説明

時事問題

道徳；記事から価値の追求

〈新聞学習　取り組み〉

〈新聞学習　取り組み〉

〈新聞学習　話し合い〉

３　結果

（１）新聞学習

読み、考え、記述するという取り組みを毎週行ったことで習慣化した。

「新聞学習を行ってよかったと思うか」の質問によかった」と答えた生徒は１００％

その中で、「いやだと思うときもあった」と答えた生徒が２８％いた。取り組み自体はよいことだと思い取り組んだが、週によってわかりにくい記事だったり、興味のない記事に対しては面倒になったりした、と答えている。

自由記述の感想で多かったのは、

・この学習を通して新聞に親しめたのがよかった。

・知らないことを知ることができた。

・受験に役立ちそうでためになった。

・もっとじっくり読みたかった。

などの感想である。多くの生徒が家庭で新聞に触れる機会がないことや、普段あまり新聞に親しんでいないことから、新聞を興味深く読めてよかった、と考えた生徒が圧倒的に多かった。さらに

・このような取り組みを増やして欲しい。

・すごくためになった。

・毎週行うことに慣れ習慣化した。

・いろいろなニュースを理解していく力を身につけたいと思った。

などの前向きな意見も多かった。

（２）総合学習

各学年、導入を新聞記事で行い、調べ学習は主にインターネットや図書を使用した。「食文化」や「世界に起こっている課題」は多岐にわたっているので、記事も多く、調べ学習の入り口として充分だった。だが、世界の中学生の生活についてはなかなかふさわしい記事に巡り会えなかった。

各学年調べたことを文化祭で発表した。知らなかったことを知ることができ、他学年にも興味と関心を広げた。発表では、パワーポイントはもちろんだが、そのほか、寸劇や実演などを取り入れた工夫も見られた。

（３）各教科

①国語　読書教材の発展として、記事の読み比べを行った。同じ話題でも新聞によってどのように視点が違うのかまとめた。

②社会　授業の導入として新聞記事を使用した。歴史や公民で新聞やタブレット等で学習内容を更に深める場、自分の考えを更に深める場を設けた。

③道徳　数少ない取り組みではあるが、記事を使って価値の追求を行った。

４　考察

新聞学習の結果から、生徒は読むことに対し苦手意識を持ちながらも、記事を読む場面が設定されたり、機会が与えられたりすれば、さまざまな事柄について知りたいと思っていることがわかった。また、自分や仲間の意見が掲示されることで興味関心が高まり、次回の取り組みへのモチベーションとなった。

今年度、生徒は提示されたものに前向きに取りむことができた。次年度は自分で記事を見つけ、自分の考えを述べ仲間と共有できる取り組みに発展できると考える。

総合学習においては、新聞の記事が導入となり、取り組みや思考のきっかけとして有効だったといえる。まとめや発表の形を改善して、多くの仲間や自分たちの調べたことをわかりやすく伝えるような取り組みにしていきたい。

今年度は限られた教科での試験的な取り組みをした。道徳では、日頃からアンテナを高くし、より多くの記事をストックしておく必要がある。次年度はより多くの教科で新聞記事に触れ、リアルタイムの情報で授業を作る場面を設けたい。

５　まとめ

取り組み開始時には、気が進まなかった生徒達だが、習慣として新聞を読んでいくと、何気ない会話の中で記事の内容を話題に入れたり、掲示物を立ち止まって眺め仲間の意見を読んだり、と生活の中に新聞という存在が入っていったようだ。次年度は生徒が主体的に記事を選んだり、紹介したりする活動を通し、更に深める取り組みにしていきたいと考える。

思考力・判断力・表現力の育成
～新聞を活用した主体的・協働的な学びを通して～

香取市立新島中学校　　松井　初美

１　はじめに

本校はＮＩＥ実践校４年目である。本校の研究主題は「主体的に学ぶ生徒を育むための学習指導の研究～実践モデルプログラムを取り入れた授業実践を通して～」である。研究の３つの柱の一つとして「ＩＣＴ教育とＮＩＥ教育の推進」を位置づけている。

今までは、「ＮＩＥ＝紙の新聞を活用する」という図式が一般的で、新聞を活用したり、学習新聞を作成したりする活動を行ってきた。けれども、文科省のGIGAスクール構想で１人１台端末の環境整備がされ、ますます新聞と子どもたちの距離が広がるのかという思いもあった。各新聞社も児童・生徒がデータベースを活用できるようなシステムを作っているが有料で高額なものもある。公立の一中学校が予算化するのは難しい。では、どうＮＩＥとＩＣＴをリンクさせればよいか。それを考える1年だった。

２　実践状況

（１）新聞コーナーの設置

図書室に新聞を配架し、過去の新聞は資料として活用できるように、新聞社ごとにコンテナを用意し、ストックできるようにした。今年度も、いろいろな学習でストックした新聞を活用している姿が見られた。

図書室とは別に昇降口付近にも新聞コーナーを設置している。そこには、生徒に読んでほしい記事や、新聞社からいただいた号外を掲示した。今年度はパリ五輪・パラリンピックが開催され、金メダリストの号外など数多くの号外を掲示することができた。運動系の部活に所属している生徒が多く、スポーツ記事には興味・関心が高い。

また、中秋の名月の写真が各社掲載されたときは、それを並べて掲示し「あなたが選ぶ名月の写真」と題して全校で選んだ写真にシールをつけて投票した。

（２）学習eポータブル（L-Gate）のアプリ作成

データベースの購入は難しいので、L-Gateでアプリの作成を行い、各新聞社のデジタルサイトへのリンクを貼った。

・朝日新聞（https://www.asahi.com/）
・毎日新聞（https://mainichi.jp/）
・読売新聞（https://www.yomiuri.co.jp/）
・中日新聞（新聞切り抜き作品）
・日本新聞協会（教育に新聞を）

調べ学習の時にアプリをクリックするとサイトが開けるので、効率的に記事を探すことができる。ただし、記事によっては途中から有料となるので注意が必要である。

（３）事前アンケート（R6.4）

①家庭での新聞購読状況

・購読している　　…４３％
・購読していない　…５７％

②購読家庭での状況

・毎日読む　　… 0％

・時々読む　　…37％

・ほとんど読まない…37％

・全く読まない　　…26％

③新聞を読むことは必要か?

・必要である　　…61％

・必要でない　　…39％

※購読していない生徒も回答。

昨年度とほぼ同じような数値である。 また、購読していない生徒も読む必要性を感じているのは昨年と同様である。 ただ、学年が上がるにつれてＳＮＳ等を見る時間も増え、ニュースや情報はそこから入手すればよいと考える生も増えた。

（４）授業での取り組み

① 1年国語〈新聞活用の導入Ⅰ〉

「新聞に関するクイズを出題」

・同日同紙の13版と14版の一面を提示して違いを見つけさせ、なぜ違うのかを考えさせる。

・同日数紙の一面を見比べ、同じニュースなのに写真や見出しのレイアウトが違うことについて考えさせる。

・新聞のインクの原料やカラーについての出題。

・今の新聞と昔の新聞の違いについての出題。

このクイズは毎年導入で行っていて、新聞について興味・関心をもつ生徒の姿が見られた。

② 1年国語〈新聞活用の導入Ⅱ〉

「新聞から気になる記事をスクラップしよう」

新聞を一面から最後の面まで目を通し、気になる記事をスクラップする。 新聞を購読していない家庭もあるので、新聞にどのような記事が載っているかを知る時間をとった。 熱心に記事を探して読む姿が見られた。 スクラップシートには、新聞名、月日、選んだ記事の見出しを書かせ、記事を貼付させた。 ４月の上旬だったので、能登半島地震から３ヶ月が経った記事を選んでいる生徒が多かった。 話を聞くと「元日の地震は衝撃的だったから」とのこと。 自分が考えたり、感じたりすることと選ぶ記事は繋がっていることがわかった。 そのような中で記事を貼らずじっと紙面を見ている生徒がいた。 大きな隕石を絵で表した広告だった。「広告でもいいよ。 シートからはみ出してもいいから貼ってごらん。」その後生き生きとハサミで切り貼っている姿がとても印象に残った。 導入の学習では制限をかけないことが大切である。 興味・関心をもって記事を読めば上出来である。

③ 1年国語

「『蜘蛛の糸』のはがき新聞作成」

※昨年度と同様なので、詳細は昨年度のＮＩＥ実践報告を参照。

④ 国語の朝学習

前半は昨年度同様コラムの視写を行ってきた。 後半は全国学力･学習状況調査の結果を受け、リーディングスキル向上のために、記事の読み取りに重点をおいた。

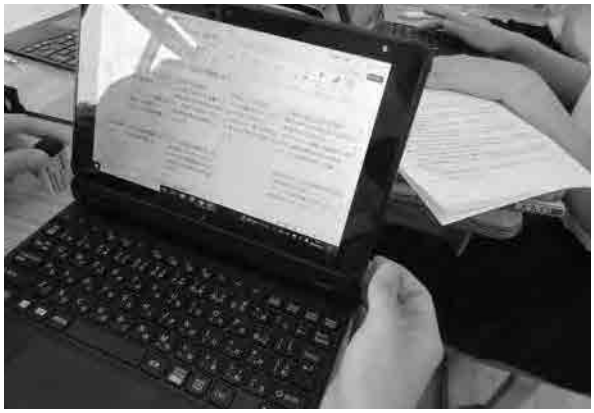
〈1年〉

教師がコラムから問題を作成。

【出題の仕方】
・漢字の読み。
・語句の意味。
・内容について（記述や書き抜きで解答）
模範解答を作成するが、記述の解答もあるので教師が採点した。
〈２年〉
読売新聞社の「よむYOMUワークシート」の活用。（年度当初に副教材として予算化。）
【活用の仕方】
①問題シートに各自で取り組む。
②解き終わった生徒から解答編を見て自己採点する。
③関連記事のシートを読み、考えを深める。
新聞記事には政治・経済・社会科学・自然科学などさまざまなジャンルの情報がある。それらを読み解くことは、国語だけではなく、他教科の読解力向上へもつながる。解答編には答えを導き出すための考え方等が記載されているので読解の手立ての一助となる。さらに関連記事を読むことで視野を広げたり考えを深めたりすることができた。

⑤ ３年国語

「新聞が伝える情報について考えよう」
教科書（教育出版）に「社説を比較する」という題材がある。今年度は生成ＡＩのリスクについての社説の読み比べを行った。今、話題の生成ＡＩ。便利だというメリットについては知られているが、今回はリスクについて読み取り考えさせたいと思った。
【使用した社説】
・「ＡＩのリスク」
2024年4月6日朝日新聞朝刊
・「ＡＩの権利侵害」
2024年3月29日読売新聞朝刊
両紙の共通点や独自に取り上げている内容を整理し、新聞社の主張を読み取っていった。最後に「生成ＡＩとどう向き合うか」という意見文を書く学習を行った。その際に各自でタブレット端末を使用し、生成ＡＩについて調べさせた。生徒は身近なものに生成ＡＩが使用されていることを理解し、自分の体験や経験を踏まえて意見文を書くことができた。



⑥ 3年社会（公民）

選挙の学習で、各政党の公約を読み比べ、共通点や相違点を探した。公約から、政府の重要政策や国民の関心事項を考えた。生徒からは「少数政党の方が具体的な公約が掲げられている」「本当に公約を達成できるのか」などの意見があり、経済や社会保障の学習にもつなげることができた。
裁判の学習では、実際の裁冤罪事件の記事を活用した。冤罪が起こらないためにはどうすればよいか、冤罪によって人生の多くを失ってしまった人へどのような補償が必要かを考えた。
また、裁判員裁判に参加し、判決を下す側になった場合に、どのような姿勢で参加すべきかなどグループで話し合い、考えを深めることができた。

⑦ １、２年総合

ＳＤＧｓの学習で新聞を活用した。まず、千葉県立成田国際高等学校教諭の石毛一郎先生と朝日新聞東京本社の遊佐恵美子さんを招いてカードゲー

ムと新聞を使ってＳＤＧｓの導入授業を行った。

【1年生の取組】

出前授業後、SDGｓの17の目標の1つをキーワードとして各自でウェビングマップを作成し探究するテーマを考えた。 次にテーマに沿った情報を新聞から収集し、スクラップ新聞を作成した。 完成した新聞はクラスで共有し、意見交流を行った。 交流することによってSDGｓに関する様々な記事やそれに対するクラスメイトの考えにふれ、自分の考えを広げたり、深める姿が見られた。

【2年生の取組】

本校の２年生の総合的な学習の時間のテーマは「福祉」なので、SDGｓからバリアフリーについて深める学習を行った。 高齢者や妊婦体験グッズを借りて実際に体験したことを基に、各自がテーマを設定し、調べ学習を行いレポートにまとめた。

⑸　全校での取り組み

① 道徳

「読売新聞の『The　論点』の紙面の活用」

Ａ論、Ｂ論２つの意見にふれ、そのテーマについて自分の考えをもち、クラスメイトと意見交流をする授業を行った。 身近な話題が取り上げられ、記事を読むことにより様々な考え方があることに気付く。 クラスメイトと意見交流をしながら自分の考えをもち、日常生活に生かせる授業を心がけた。 振り返りシートを読むと自分事として捉え、体験や経験を踏まえて考える様子がうかがえた。

「パラリンピックの記事を読んで考えたことは…」

パラスポーツについての動画を視聴後、生徒それぞれが気になるパラリンピックの記事をスクラップし、クラスメイトと意見交流を行った。 どんな困難なことがあってもあきらめず、粘り強く立ち向かう選手の姿に感銘を受ける様子がうかがえ、学ぶことが多かったようだ。 1つの記事をみんなで読み合うことも大事だが、自分で選ぶ記事から「何が大切なのか」を考えることによって、主体的に学ぶ姿勢が育まれるのではないかと考える。

②「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募

今年度も全校で「いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募した。 昨年度同様7月にコンクールの応募の仕方について説明し、夏休みの課題とした。 新聞を購読していない家庭は学校で記事を選び用紙に貼付した。 今年度はパリ五輪・パラリンピックの開催があり、その関連記事を選んでいる生徒が多かった。 また、学校奨励賞もいただくことができた。

③ 今年の１０大ニュースを考える

今年度も12月に日本の10大ニュース、海外の10大

ニュースの記事を読みながら考え、新聞社に応募した。 クラスメイト同士で1年をニュースで振り返り、考えながら選んでいた。

３　成果と課題

○アドバイザーとして助言をしながら実践を行ってたところ、若手職員が積極的に新聞を活用する姿が見られた。

○1年生の早い時期に新聞活用の導入授業を計画的に行うことで、様々な教科、領域で新聞を活用することができた。

○ＮＩＥとＩＣＴをリンクさせる試みをいくつか行うことができた。

▲実践をしにくい教科があった。

▲次年度は実践校ではないので新聞をどのように用意するか。

４　考察及びまとめ

４年間の中で様々な実践を行うことができた。ＮＩＥアドバイザーとして得た知識や他校の実践を職員に紹介し、徐々に実践の幅を広げることができた。また、校内だけではなく、家庭や地域にも新聞活用の良さを伝えることができてよかった。

「成果と課題」のところでも述べたが、実践校を外れた後の新聞の確保が大きな課題である。 生徒も職員も読みたいときや調べたいときに図書室に新聞があるという環境が当たり前になるようになってほしいと切に願う。 また、「継続は力なり」という言葉がある。 次年度以降もＮＩＥを推進し生徒の糧としたい。

新聞に親しむための活動
～現代社会と授業をつなげるために～

九十九里町立九十九里中学校　　伊藤　竜一

１　はじめに

本校は令和６年度よりＮＩＥ教育推進校の指定を受け、本年度が1年目の取り組みとなる。

はじめに、３年生を対象に「普段新聞を読むか」と聞いたところ、読んでいる生徒は1割も満たない状況であり、ニュース等の情報はＳＮＳやテレビから得るのが主流であった。生徒は、家で新聞に触れる機会がほとんどなく、新聞に親しみを感じていない現状が明らかとなった。

そこで本校では、各学年フロアに新聞を置き、いつでも閲覧できる状況を整備した。そして、３学年社会科の取り組みを中心に、授業と新聞記事の内容に関連をもたせることで新聞記事を読む機会を増やすことに注力した。

これにより、社会的事象への知識や関心を高め、事象に対する自分の考えをまとめることで思考力と表現力の育成を目指した。

２　実践状況

【実践１　新聞比較】

社会科の公民分野では「メディアリテラシー」をテーマに3社の朝刊一面を比較し、それぞれの違いやその理由を考えさせる学習を行った。個人で見つけた違いや特色を班の中で共有し、意見を交わすことで新聞のもつ多様な視点に気付かせることを意識した。

【実践２　授業とつながりのある記事を読む】

授業で取り扱った内容の新聞記事を定期テストに活用するために、公民分野の「人権と共生社会」単元を踏まえ、「袴田巌さん再審無罪」の記事を引用した。当時の事件の背景や判決内容を人権保障についての既習事項と照らし合わせて自分の意見をまとめさせた。

【実践３　裁判員裁判を考える】

授業では桃太郎の昔話を例に「鬼を退治した桃太郎に罪はあるか？」をテーマに裁判員に選ばれた設定で話し合い活動を行った。自作の裁判資料から事件の経緯、検察側・弁護側の意見、証言者の意見を比較し、班内で協議することで、意見の統一を図った。

３　結果

【実践１】

地方紙と全国紙の違いに着目し、地域に特化した内容があることに気付く生徒が多かった。 さらに、全国紙の中でも朝刊一面の記事の扱いに、それぞれの新聞社の個性や強みが出ているといった多角的・多面的な意見が出た他に、細かな違いを挙げるなど深く読み込んでいる生徒もいた。

【実践２】

授業内で取り上げられたことが、現代とリンクしていることをあらためて思った生徒が多かった。 また、新聞記事の中にこれまでの事件の経緯がまとめられていたことで、自分の身に置き換えたらどうするかといった視点で記述した意見や、裁判の問題点を指摘した意見などが見られた。 これらの記述から、授業の内容を新聞記事を通してより深めることができた。

【実践３】

情報の比較、精査、などのリテラシーとこれまでの既習事項を振り返らせ、判断させた。 このとき、生徒の中で袴田事件の内容に立ち返りながら意見を交わす場面が見られた。 実際に、この授業後の振り返りシートには袴田事件と結びつけて考え、単純に答えを出せなかったという感想が散見された。 自分たちの判断が本当に正しいのか考えつつ、多角的・多面的な意見をすり合わせながら、班の中で合意形成をすることができた。

４　考察

以上のことから、学習した内容を深めさせるだけでなく、これまでの学習が現代社会とどのように結びついているのかを知るために、新聞は効果的だった。

特に、新聞は教科書と違い、一つの事象に対して、各社多様な意見が掲載されており、様々な視点に立って考える上で役立った。 このとき、ただ記事を読むのではなく、必要な情報を選び、活用する情報リテラシーやメディアリテラシーに対する意識をしっかりもたせることで、新聞はより良い教材になると思う。

実際に、生徒たちは自分の意見だけではなく、他者の意見から自分と異なる意見を踏まえて考えをまとめることができた。 この活動では、自分と違う意見に対して、その根拠を質問することで自分にとっての新たな視点に気付き、考えを深めることができた生徒もいた。

このような学習活動から、主体性や思考力・表現力などの確かな学力を備えた生徒の育成に新聞は必要であると感じた。

５　まとめ

初年度としては新聞と授業内容をリンクさせることで、学習した内容と日常のつながりを生徒に意識させることができた。 この取り組みを各教科に広げていくことで、来年度さらに新聞に親しむ機会を増やしていきたい。ＩＣＴ機器を活用して自由に新聞が読める環境があると、より取り組みの幅は広がると思った。

また、本校では２学期以降、新たな取り組みとして、朝の読書タイムの中で月に１回、新聞記事を読んで２文、８０字以内でまとめる「Ｒ８０」の活動も実践し始めた。 来年度の活動の中でも継続し、改めて報告したい。

主体的に新聞記事を活用する取組
～アンケート調査をもとに～

千葉市立貝塚中学校　　小林　瑞希

１　はじめに

本校は令和５年度よりＮＩＥ教育推進の指定校となり、今年度が実践２年目となる。

本校は毎年、学力向上を図るために研究を続けてきた。研究の中心として、とくに「読解力の向上」に重点を入れてきた。今年度は、昨年度の実践を更に深めていき、アンケート調査を年に２回行うことで、その変容を捉えた。

２　昨年度の取組

昨年度実践した取組は以下の３つである。

（１）全校生徒一斉に取り組む「Ｋタイム」

毎週木曜日の朝読書の時間（１０分間）に「Ｋタイム」と呼ばれる時間がある。流れは以下の通りである。

Ⅰ　読売新聞が発行しているワークシート付き記事を読む。

Ⅱ　内容について解答し、自分なりの意見をできるだけたくさん記入する。

Ⅲ　担任の先生が生徒のワークシートをチェックし、自分の意見を記入する欄の内容が優れている生徒を各クラス２名選出する。

Ⅳ　昇降口や学年のフロアの掲示板にその生徒のワークシートを掲示をする。

このワークシートの配布等は学習委員会が行っており、ワークシートの答えは翌週のワークシートの裏面に記載されている。

（２）新聞記事掲示コーナーの設置

昇降口近くの多くの生徒が通る廊下の掲示板に「貝塚新聞」と題し、新聞記事の切り抜きを掲示している。定期的に掲示する新聞記事の内容を変えており、日本や世界の情勢、地域のニュース、中学生が関心をもちそうな記事を中心に掲示している。

（３）社会科の授業での新聞記事の活用

今年度は中３の社会科の授業において新聞記事を積極的に使用した。新聞を購読している生徒が少ないため、最近のニュースについて授業の前半に教師が話題にすることでニュースに関心をもたせたり、新聞記事を実際に読む時間をとったりすることで新聞に親しむことに力を入れた。３回の授業で行った実践は以下の通りである。

1時間目

はじめに、新聞に親しむことを目的に、一人一部新聞を配布した。興味のある記事を切り抜き、ノートに貼って感想を書かせた。（スポーツ関連でも可とした。）

2時間目

次に公民的分野の内容に沿うような政治・経済・国際社会に関する記事を選び、切り抜いてノートに貼って意見を書かせた。自分なりに賛成・反対の意見を書くことで社会参画の意識を高めることが目的であった。

3時間目

次に自分が選んだ新聞記事について意見交流を行った。他者の意見を聞くことで、自分の考えの幅を広げたり、ニュースを更に深堀したいと思わせたりすることが目的であった。

以上のような授業を行い、新聞に触れる機会を増やしていった。

３　事前アンケート調査（６月）

今年度の実践を行うにあたり、生徒の実態を把握するため、事前にアンケートを行った。

〇調査対象：中学1～3年（18 クラス）

Ｑ1　普段から新聞を読みますか

①　読む　2.9%

②　たまに読む　12.2%

③　読まない　84.9%

Ｑ2　新聞が身近にあったら読みたいですか

①　読みたい　5.8%

②　どちらかといえば読みたい　32.5%

③　どちらかといえば読みたくない　38.3%

④　読みたくない　23.4%

Ｑ3　西階段１階の新聞記事（貝塚新聞）を読んだことがありますか

①　ある　30.5%

②　ない　69.5%

Ｑ4　Ｋタイムの取組によって、新聞記事を読むことに慣れましたか

①　慣れた　22.1%

②　どちらかといえば慣れた　59.9%

③　どちらかといえば慣れていない　12.8%

④　慣れてない　5.2%

Ｑ5　Ｋタイムの取組は読む力の向上につながっていると感じますか

①　感じる　27.3%

②　どちらかといえば感じる　47.7%

③　どちらかといえば感じない　16.9%

④　感じない　8.1%

４　今年度の取組

（１）について

昨年度、読解力の向上につながった、全校一斉の取組であるＫタイムは今年度も継続して行った。朝、登校したらすぐに始められるように、学習委員会の生徒が早めに配布して取り組めるようにした。

（２）について

アンケート調査から、新聞記事コーナーを見ている人が３分の1にも満たないという結果が出たため、その改善を図った。

見る人を増やすために、３年生中心に自分たちで記事を選んで掲示場所を決める活動を行った。

【授業の流れ】

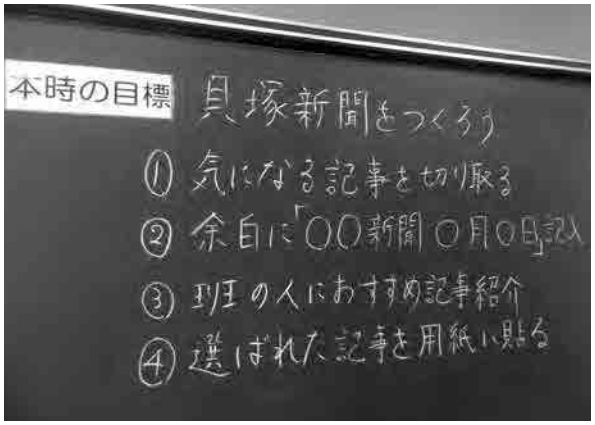
○貝塚新聞をつくろう！

Ⅰ　気になる記事を切り抜く

Ⅱ　余白に「○○新聞○月○日」と記入

Ⅲ　班の人におすすめの記事を紹介する

Ⅳ　選ばれた記事を色付き模造紙に貼る



大きな色つき模造紙に記事を貼るため、各班で２～３つ選んでもよいことにした。模造紙のどこに記事を貼るのかを考えさせながら活動をした。

（３）について

今年度は、中３の社会科の授業において、新聞を利用して、情報を読み取る力をつける授業を行った。

【授業の流れ】

○新聞でメディアリテラシーを身に付けよう！

Ⅰ　新聞を複数読み、気になる記事を1つ選び、ノートに貼る。

Ⅱ　ノートに貼った記事について、批判的に読み取り、疑問点や自分なりの意見をできるだけたくさん記入する。（「なぜ～」「どうして～」「○○とは何か」などの言葉を使うとよい、と伝える）

Ⅲ　班になり、班員に記事を紹介し、お互いに質疑応答をする。（班員が選んだ記事に対して批判的に読み取る。）

Ⅳ　クラス全体で班で出た意見を共有する。

Ⅴ　情報をすべて鵜呑みにするのではなく、自分なりに判断し、さまざまな角度から批判的に読み取ることが大切であることを伝える。

５　成果

○事後アンケート調査（１２月）

Ｑ１　普段から新聞を読みますか

①　読む　2.6%

②　たまに読む　11.7%

③　読まない　85.7%

Ｑ２　新聞が身近にあったら読みたいですか

①　読みたい　7%

②　どちらかといえば読みたい　26.7%

③　どちらかといえば読みたくない　40.1%

④　読みたくない　26.2%

Ｑ３　西階段１階の新聞記事（貝塚新聞）を読んだことがありますか

①　ある　51.7%

②　ない　48.3%

Ｑ４　Ｋタイムの取組によって、新聞記事を読むことに慣れましたか

①　慣れた　24.7%

②　どちらかといえば慣れた　57.1%

③　どちらかといえば慣れていない　13%

④　慣れてない　5.2%

Q５　Kタイムの取組は読む力の向上につながっていると感じますか

①　感じる　34.4%

②　どちらかといえば感じる　40.9%

③　どちらかといえば感じない　17.5%

④　感じない　7.1%

５つの質問すべてにおいて、肯定的な回答の割合が大きくなった。年間の継続した取組により、その成果が現れたと考えられる。それぞれの取組の成果については以下の通りである。

（１）について

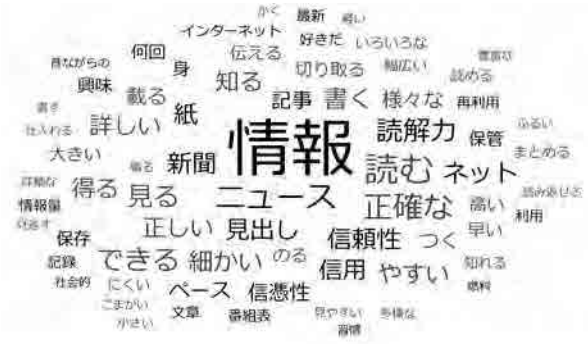
全校一斉の取組を続けているおかげで、全体を通して、新聞記事を読むことに慣れた生徒や、読解力の向上につながったと感じる生徒が増えた。また、学年が上がっていくにつれ、文章量も増えていった。

（２）について

３年生のクラスで行い、お互いに記事を見合う活動をしたことで、掲示を見る人が増えた。また、生徒自らが新聞記事を選ぶため、主体的に時事に関心をもつようになった。アンケート調査でも、６月から12月までの間で実践を行ったことで、見る人の割合が大きく増加した。自分たちで記事を選ぶ活動により、掲示コーナーを見ようとする意識が芽生えたと考えられる。

（３）について

情報を批判的に読み取ることで、メディアリテラシーを身に付けることができた。新聞の情報を疑うという経験をほとんどしたことがない生徒が多かったので、新たな視点で物事を見ることができるようになったと考えられる。



６　課題

（１）について

・昨年度に引き続き行ったが、記事の内容を読み取る力が身に付いたかどうかは個々人によって差があり、一概に成果が出たといえる調査ができなかった。

・学習委員会の役割ではあるが、教員が優秀作品を選ぶ仕組みだったので、生徒自身も主体的に取り組もうとすることがあまりできなかった。

（２）について

・自分たちで選んで記事を貼る活動により、主体的に記事を読むことができたが、一度しかその授業ができなかったので、継続してできたらよかった。

・お互いに新聞記事を見合うことはできたが、見て終わりになってしまったので、教科や学年の活動に組み込んでもよかった。

・掲示するのにふさわしい記事を選ぶのが難しい生徒がいた。いろんな記事を選ばせることに加え、バランスよく記事を選ぶことも常に意識する必要があった。

（３）について

・ 記事を批判的に読み取ることで、メディアリテラシーの態度が育ったが、批判的に読み取った自らの問いに対しての自分なりの考えは書くことができなかった。
・ 複数の新聞記事を比較する活動ができなかった。
・ 中1から段階的に批判的に読む力をつけられたらよかったが、中3のみの実践となってしまった。

７　まとめ

２年間、新聞を扱った教育実践をして、改めて新聞の情報量の多さや、正確さがわかった。ネット上にも多くの記事があふれているが、限定的な情報のみの記事が多く、新聞のように幅広いジャンルの情報を手に入れることはできない。そのことを生徒は授業を通して理解したと思う。

まずは私たちが日ごろから新聞に触れ、教材研究に生かしていこうとする姿勢が大切だと感じた。

ＮＩＥ実践校としての取組は終わるが、全校一斉の取組は継続して行い、新聞記事を読み取り、自分なりの考えを表す実践を続けていきたい。

持続的な生徒の社会認識形成

～新聞ノート作成を通して～

芝浦工業大学柏中学高等学校　　田巻　慶

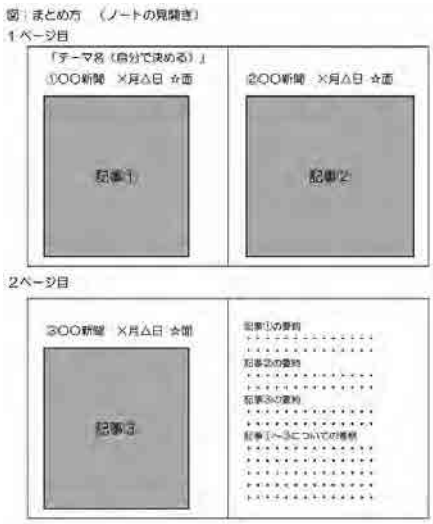
１　はじめに

本報告は、本校が令和６年度よりＮＩＥ実践指定校として認定されて1年目の実践についてである。本校ではＩＣＴ教育において先進的な取り組みがなされているが、新聞を取っていないご家庭も増えてきており、しっかりと活字に触れ、自分の意見を形にする力を育む必要性もより一層強まってきていると考えている。 積極的に新聞記事を活用して生徒の言語活動を促す取り組みとして「新聞ノート」の実践を紹介する。

２　実践状況

（１）新聞ノートとは

新聞ノートは社会科の長期休暇の際の課題として生徒に取り組んでもらうものである。 3つ以上の共通するテーマの記事をスクラップし、ノートに糊付けする。 記事ごとに内容の要約を2行から3行でまとめ、最後に考察として3つの記事を読んで考えたことや感じたことや疑問に思ったこと、関連して調べたことを書く。



〈新聞ノートイメージ〉

この課題を中学3学年と高校1年生を対象に、冬休みと春休みに課した。 夏休みは自由研究などほかの課題も多く出るため課していないが、中学2年生と高校1年生では自分が関心を持った新聞記事のスクラップを20枚以上集めることを課題にした。詳細は後述するが、東京新聞主催「第21回新聞切り抜き作品コンクール」に出品するための作品作りの材料集めを兼ねている。

（２）新聞を読む機会の増加

各社から送られてくる新聞は学年フロアの共有スペースに設置した。 図書館に倣い、各社の新聞に穴開けパンチで穴を開けて、会社ごとに紐でまとめた。 スクラップしたい生徒は表に新聞記事の会社、面数を記入するようにした。

（３）新聞ノートの発表

本校では高校1年生で歴史総合が設定されており、その授業内で新聞ノートの発表機会を設けていた。 歴史総合では各単元で学習した歴史事象を考察し、現代的な諸課題の形成にどのように関わるか理解する学習が求められている。 常日頃から自分の関心のあるニュースにアンテナを張り巡らせ、歴史事項と結びつけるような取り組みとして新聞ノートの発表をおこなった。 1年間でクラスの1人1回が発表する機会を割り当て、授業の冒頭10分で新聞ノートの内容を発表してもらう。 授業者がその発表にコメントし、フィードバックをおこなう。 歴史総合という授業の特性上、政治や国際関係に関する記事を取り上げる生徒が多くいた。

（4）**外部コンテストへの参加**

この新聞ノートの取り組みをさらに発展させて、自分のテーマを決めて、記事をまとめ上げる活動として、東京新聞主催「第21回新聞切り抜き作品コンクール」に参加した。同コンクールは新聞ノート作成のプロセスを活かして、自分の関心のある記事を蓄積した成果をまとめることができるため新聞ノートの取り組みのゴールに位置づけている。今年度は中学２年生全員と高校1年生３分の２の総勢400名弱の作品を出品した。やはりゴールがあると、活動にもメリハリが出てくると感じる。

３　結果

まず活用の機会についてであるが、共有スペースで新聞を閲覧し、記事をスクラップする生徒の活動は1人が始めると、他の生徒にも波及していき、生徒が新聞に目を通す機会が格段に増えた。一番多い学年で、149回スクラップされた。１人の生徒が複数の記事をスクラップしたケースもあるが、学年生徒のおよそ8割が今回送られてきた新聞を活用したことになる。

〈新聞切り抜きイメージ〉

次に取り組みの質についてである。新聞ノートは長期休暇明けに回収し、コメントをつけて返却している。ルーブリック評価を設定して、課題の説明の際に評価について案内していることから、記事の要約と考察を書く形式を守る生徒がほとんどであった。しかし、その一方で考察の部分を読んでみると、感想に留まっている生徒が一定数見受けられる。学年が上がれば、その数も減少傾向にあるが、なかなか改善されない点も事実である。

上述の新聞切り抜き作品コンクールについては中高ともに入賞することができた。特に高校生については、総合型選抜を見据えた自分の問題関心を深める機会になるとともに、受賞生徒にとっては業績の一つにもなり、自信を深める良い機会となった。

４　考察

長期休暇の課題となると、どうしてもモチベーションが上がらずに、保護者に言われて重い腰を上げる生徒もいたと思うが、今回共有スペースに新聞を設置することにより、生徒の積極性が可視化されたことで、生徒同士の刺激になっていたと感じる。

また、授業内での発表や外部コンテストへの参加によってフィードバックの機会を創出することも生徒が継続して新聞から学ぶ機会を得る要因になったと考える。

５　まとめ

次年度以降も今年度の取り組みを継続していきたい。今年度の成果からロールモデルとなる生徒の作品を整理し、適切なタイミングで生徒に提示することで、学年全体で切磋琢磨しながら新聞の学びを深めていきたいと思う。

「新聞から社会を読み解く」

千葉県立松戸国際高等学校　　越川　涼太

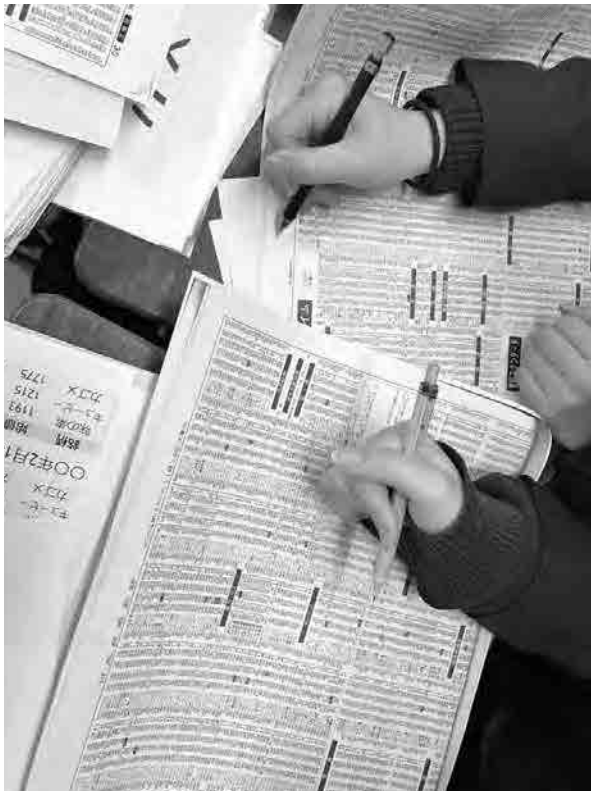
１　はじめに

本校では令和6年度よりＮＩＥ推進校の指定を受け、本報告は1年目の報告である。地歴公民科の授業の中で、新聞を作るといった活動はしていたものの、実際に新聞に親しみを持ち、日常的に新聞を手にしている生徒は多くない。本報告では、本校2年次で履修する「公共」の授業における新聞活用事例を中心に紹介する。

２　実践状況

（１）株式欄の読み取り

本実践は、企業活動とそれに必要な資金調達をどのように行うかという視点を中心に据え、株式会社のしくみを理解できることを目標に授業を行った。まずは、株式欄に記載されている、「始値」や「終値」という言葉がどのようなものなのか、また、そもそも株式とはどのように売買され、どのような仕組みによって利益を得られるのか、基本的な事項を押さえていった。そのうえで、新聞の株式欄に見立てた資料(授業者作成)を配布し、株式売買のシミュレーションを行うことによって、円滑に新聞の株式欄の読み取りに移行できるようにした。



（２）新聞の読み取り

初めて新聞の株式欄を目にする生徒も多く、数字や文字の多さから忌避感を示す生徒も少なからずいた。しかし、シミュレーションで行った読み取り方法を参考にすることで、徐々に株式の売買によって利益を創出する、いわゆるキャピタルゲインの考え方を用いながら、株式欄の読み取りを進めることができていた。また、活動の中で、なぜ株価が新聞で読み取れるような変動の仕方をしているのだろうか、というような疑問をもち、その背景に潜む社会情勢や企業業績等に目を向けている生徒も見受けられた。

３　結果

班ごとに活動を行ったことで、各班内での協力が見られ、連携・協働の結果、多くの生徒が株式欄を読み取ることができていた。大きな利益（リターン）を生み出せる可能性があるということを理解しつつ、それと同時に大きなリスクもあるのだということも、新聞という実際の社会を映し出す媒体を読み取ることで、実感することができていた。さらには、社会に参画するという視点をより一層深めることもできた。

授業後のアンケートでは、「自分が想像していなかった理由で株価が上がったり下がったり変動していたのが印象的だった」、「株価の上がり下がりで景気もわかるし楽しい」など、新聞の株式欄を読み取ることに対して肯定的な意見を記入している生徒が多くみられた。

４　考察

新聞の株式欄は、実際の銘柄や株価等が記載されていることもあり、生徒はより一層、現代社会において各企業が置かれている状況に目を向け、株価変動の要因等を考えることができていた。 さらに、株式欄を読み取ることによって、ハイリスク・ハイリターンの考え方や、株式をはじめとした社会を読み解く指標の重要性にも気づくことができたのではないか。

５　まとめ

新聞という媒体を利用することは、生徒にとって、より社会に密接に関連づいた視点を身につけさせることにつながることが改めて実感できた。 次年度もＮＩＥ推進事業実践校として、さらに効果的な活用方法を模索していきたい。

２０２４(令和６)年度ＮＩＥ実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL／FAX	備考	
1	我孫子市立湖北小学校	長田　英一	園　　陽平	〒270-1122 我孫子市中里95	04-7188-1002 04-7188-3312	2023・ 2024年度	継続
2	匝瑳市立豊栄小学校	角田　直彦	大木　　浩	〒289-2147 匝瑳市飯倉1847	0479-72-0531 0479-70-1322	2023・ 2024年度	
3	袖ケ浦市立中川小学校	庄司　光利	多田祥亜希	〒299-0236 袖ケ浦市横田2583	0438-75-2015 0438-75-6717	2023・ 2024年度	
4	八千代市立大和田西小学校	島津　智恵	川上しずく	〒276-0046 八千代市大和田新田40-3	047-450-2098 047-450-9743	2023・ 2024年度	
5	御宿町立御宿中学校	芝﨑　丈太	石井　裕子	〒299-5103 夷隅郡御宿町新町68	0470-68-2101 0470-68-2813	2023・ 2024年度	
6	香取市立新島中学校	多田　雄一	松井　初美	〒287-0816 香取市佐原ハ4428	0478-56-0702 0478-50-3090	2021・ 2022・ 2023・ 2024年度	
7	千葉市立貝塚中学校	廣岡　徹彦	小林　瑞希	〒264-0020 千葉市若葉区貝塚1-7-1	043-231-7077 043-232-4937	2023・ 2024年度	
8	市川市立鶴指小学校	白石　恵介	竹内　光司	〒272-0025 市川市大和田4-11-1	047-379-3588 047-379-3589	2024・ 2025年度	新規
9	印西市立高花小学校	角鹿　智章	岩井　聡志	〒270-1342 印西市高花2-4	0476-46-6211 0476-46-6212	2024年度	
10	鎌ケ谷市立鎌ケ谷小学校	飯塚　博文	島根　　渉	〒273-0124 鎌ケ谷市中央2-1-1	047-442-1105 047-442-1106	2024・ 2025年度	
11	千葉市立園生小学校	宇井　高一	大木保乃香	〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台9-30-1	043-251-8149 043-284-4971	2024・ 2025年度	
12	市原市立菊間中学校	宮内　雅史	及川　幸子	〒290-0007 市原市菊間1850	0436-41-3618 0436-42-2667	2024・ 2025年度	
13	九十九里町立九十九里中学校	足立　康幸	伊藤　竜一	〒283-0104 山武郡九十九里町片貝1899-4	0475-76-4001 0475-76-7302	2024・ 2025年度	
14	芝浦工業大学柏中学高等学校	中根　正義	田巻　　慶	〒277-0033 柏市増尾700	04-7174-3100 04-7176-1741	2024・ 2025年度	
15	千葉県立松戸国際高等学校	飯生　政之	越川　涼太	〒270-2218 松戸市五香西5-6-1	047-386-0563 047-386-8518	2024・ 2025年度	

2024（令和６）年度　千葉県ＮＩＥ推進協議会　役員

2024年5月1日　現在

会長	松井　聰	千葉大学教育学部教授
副会長	中田邦明	千葉県小学校長会会長
副会長	榊原正策	千葉県中学校長会会長
副会長	草刈廣直	千葉県高等学校長協会副会長
顧問	冨塚昌子	千葉県教育委員会教育長
顧問	鶴岡克彦	千葉市教育委員会教育長
幹事	宮﨑晶子	千葉県小学校長会副会長
幹事	神子純一	千葉県中学校長会副会長
幹事	鈴木栄次	千葉県高等学校長協会監事
幹事	山﨑博志	千葉県特別支援学校長会副会長
幹事	大木　圭	千葉県教育庁教育振興部学習指導課主幹兼教育課程指導室長
幹事	鈴木加奈子	千葉県教育庁教育振興部学習指導課指導主事
委員	佐々木　健	朝日新聞社　千葉総局長
委員	白濱正三	産経新聞社　千葉総局長
委員	飯田克志	東京新聞社　千葉支局長
委員	佐藤大和	日本経済新聞社　千葉支局長
委員	鳥羽田継之	日刊工業新聞社　千葉支局長
委員	伊藤一郎	毎日新聞社　千葉支局長
委員	幸内　康	読売新聞社　千葉支局長
委員	小林　隆	時事通信社　千葉支局長
委員	正村一朗	共同通信社　千葉支局長
委員	佐藤大介	千葉日報社　編集局長
監査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	石川剛士	市川市立宮久保小学校教諭
アドバイザー	磯貝真規子	千葉県立佐原高等学校非常勤講師
アドバイザー	大塚功祐	千葉県立国府台高等学校教諭
アドバイザー	瀬和真一郎	松戸市立松戸高等学校教諭
アドバイザー	富永加代子	市川市立宮久保小学校非常勤講師
アドバイザー	流　雄希	市川市立平田小学校教諭
アドバイザー	松井初美	香取市立新島中学校教諭
アドバイザー	武藤和彦	市川市立妙典中学校初任者指導教員
事務局長	高橋行夫	千葉日報社読者サービス室長

2025(令和７)年度ＮＩＥ実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL／FAX	備考	
1	市川市立鶴指小学校	清水　秀峰	竹内　光司	〒272-0025 市川市大和田4-11-1	047-379-3588 047-379-3589	2024・2025年度	継続
2	鎌ケ谷市立鎌ケ谷小学校	飯塚　博文	江花　大樹	〒273-0124 鎌ケ谷市中央2-1-1	047-442-1105 047-442-1106	2024・2025年度	
3	千葉市立園生小学校	岡田　直美	大木保乃香	〒263-0043 千葉市稲毛区小仲台9-30-1	043-251-8149 043-284-4971	2024・2025年度	
4	市原市立菊間中学校	鶴山　信二	及川　幸子	〒290-0007 市原市菊間1850	0436-41-3618 0436-42-2667	2024・2025年度	
5	九十九里町立九十九里中学校	足立　康幸	内山　華穂	〒283-0104 山武郡九十九里町片貝1899-4	0475-76-4001 0475-76-7302	2024・2025年度	
6	芝浦工業大学柏中学高等学校	中根　正義	田巻　　慶	〒277-0033 柏市増尾700	04-7174-3100 04-7176-1741	2024・2025年度	
7	千葉県立松戸国際高等学校	飯生　政之	越川　涼太	〒270-2218 松戸市五香西5-6-1	047-386-0563 047-386-8518	2024・2025年度	
8	浦安市立高洲小学校	鈴木　明美	飯髙　　純	〒279-0023 浦安市高洲4-2-1	047-350-1536 047-350-1531	2025・2026年度	新規
9	柏市立柏第二小学校	金岡　幸江	西村　瑞希	〒277-0863 柏市豊四季３１０	04-7144-3141 04-7146-5210	2025・2026年度	
10	茂原市立豊岡小学校	長谷川　宏	牧野内和樹	〒299-4105 茂原市弓渡225	0475-34-7757 0475-34-7163	2025・2026年度	
11	市原市立三和中学校	香川　浩昭	馬渕　隆一	〒290-0204 市原市磯ヶ谷1703	0436-36-0141 0436-36-7675	2025・2026年度	
12	香取市立山田中学校	齋藤　史郎	松井　初美	〒289-0407 香取市立仁良356-1	0478-78-4411 0478-78-2004	2025・2026年度	
13	千葉市立幸町第二中学校	濱田　勝久	高山　拓也	〒261-0001 千葉市美浜区幸町1-10-2	043-247-3723 043-244-6901	2025・2026年度	

2025（令和７）年度　千葉県ＮＩＥ推進協議会　役員

2025年6月1日　現在

会長	松井　聰	千葉大学教育学部教授
副会長	宮﨑晶子	千葉県小学校長会会長
副会長	神子純一	千葉県中学校長会会長
副会長	領家隆史	千葉県高等学校長協会副会長
顧問	杉野可愛	千葉県教育委員会教育長
顧問	鶴岡克彦	千葉市教育委員会教育長
幹事	渡部香里	千葉県小学校長会副会長
幹事	鈴木克則	千葉県中学校長会副会長
幹事	工藤秀昭	千葉県高等学校長協会監事
幹事	小林一仁	千葉県特別支援学校長会副会長
幹事	吉田俊一	千葉県教育庁教育振興部学習指導課主幹兼教育課程指導室長
幹事	鈴木加奈子	千葉県教育庁教育振興部学習指導課指導主事
委員	永田　稔	朝日新聞社　千葉総局長
委員	白濱正三	産経新聞社　千葉総局長
委員	飯田克志	東京新聞社　千葉支局長
委員	田中信宏	日本経済新聞社　千葉支局長
委員	鳥羽田継之	日刊工業新聞社　千葉支局長
委員	竹内良和	毎日新聞社　千葉支局長
委員	溝口　徹	読売新聞社　千葉支局長
委員	小林　隆	時事通信社　千葉支局長
委員	正村一朗	共同通信社　千葉支局長
委員	平口亜土	千葉日報社　編集局長
監査	（原則、各新聞社による九社会幹事）	
アドバイザー	磯貝真規子	千葉県立佐原高等学校非常勤講師
アドバイザー	大塚功祐	千葉県立小金高等学校教諭
アドバイザー	瀬和真一郎	千葉県立松戸向陽高等学校教諭
アドバイザー	富永加代子	市川市立鶴指小学校非常勤講師
アドバイザー	流　雄希	市川市立平田小学校教諭
アドバイザー	松井初美	香取市立山田中学校教諭
アドバイザー	武藤和彦	市川市立妙典中学校千葉県スクールサポートスタッフ
事務局長	高橋行夫	千葉日報社読者サービス室長

千葉県 NIE 推進協議会事務局
（千葉日報社内）
〒260-8628 千葉市中央区中央 4-14-10
TEL 043-227-4654（読者サービス室）
FAX 043-224-3662